闘いの譜

産大斗争深化のために

產大鬪爭勝利！

発刊アピール

〝70年安保〟を、欺瞞的な〝72年沖縄返還〟や〝万国博〟によって、その焦点をボカシつつ自動延長策動によって乗り切った日帝は、その反動性を一層露骨にすると同時に、入管法に象徴されるような差別構造を拡大しながら、再度のアジア侵略に向って狂奔し始めている。騒乱罪適用から自衛隊の治安出動を考慮するまでに激化した権力の大弾圧によって、我々の戦線は一定程度の後退を示したとはいえ、我々の不屈の闘いは〝入管体制粉砕〟や〝叛軍〟等の諸闘争を主軸にして更なる高揚を期している。

この間、教育の帝国主義的再編成のモデル大学とも呼べ得る京都産業大学においては、「反動イデオロギーの注入＝体制擁護型の人間造り」と言う使命を全うするために、学生の言論・出版・集会・政治活動等の一切を禁止、又は許可制という枠の中に押し込め、本来あり得べき〈大学〉像を追求する学友の闘いを全て圧殺して来たのであった。

67年10月以降の激動の歴史の中で、多くの産大の闘う学友は、中教審答申をはるかに先取りし、産軍学協同路線を追求するような反動の砦に居るという屈辱感を闘いへの　りへと変え最前線で闘い続けた。しかしながら「個別学園闘争がそれ自体で完結することはありえず、社会総体における勝利なくして個別学園闘争の勝利はない」ことは当然であっても、学内闘争の展開という最も重

要な一点を貫徹出来なかったために、ある種の動揺を与えながらも今なお大学当局＝右翼の反撃を許してしまっていることもまた事実なのである。

今まさに我々が問われていることは、このようでしかなかった我々の闘いの一切をどのように〈総括〉し、その打開の方向性をどこに定めるのか、更にその実践としての〈行動〉をいかように展開するのかという事を置いて他には無い。私達が本書「闘いの譜」発刊に期したのも、上記の諸課題を私達が、そして産大闘争に関わった全ての諸君が実践的に果していくための一手段としてであった。私達が追求したのは「誌のためでもない、ただ自らの総括」という個々人における〈総括〉の深化であり、それを経た上での〈組織体〉創出への模索であった。私達のアピールに対して、ある者は原稿を送り、ある者は沈黙し、ある者は執筆拒否によって応えた。その顕われに相違があろうとも、真剣な〈総括〉の探求が確固として持続される限り、我々はヒエラルキーを拒否した真の闘う〈組織体〉を必ずや克ち取ってゆくであろう。

いわば流産し続けた産大闘争を全学的に爆発せしめていくには、我々はなお〈過度的〉な闘いを担っていかなければならないだろう。私達はその中にあって、決定的に不足している情宣活動・思想展開・直裁な発言の〈場〉の創出に努めてきた。本書の発刊はその小さな一つの結実である。そして本書発刊を果さんとする今、私達は次なる〈行為〉に立ち向わんとしている。

全ての学友諸君！産大闘争勝利に向って自己の戦線を構築し、最後の勝利の日まで闘い抜こう!!

「闘いの譜」編集発行委員会

目次

P.2 発刊アピール

P.4 目次

P.5 闘譜篇

1. 年譜 59年〜70年
8 闘譜 I〜VI

P.47 発言篇

1 敗者の展望
4 まず立ち上がれ
5 五・二三の隠病者
7 覚醒
10 思うこと
14 全共闘運動の位置づけ
17 〇〇学科機関紙第二号
19 蟻の死
20 「大学」との訣別

P.71 総括篇

1 自主講座レジュメ
12 ハンパク総括
16 自主製作上映映画総括
20 反神山祭総括
24 森君連帯アピール

P.105 あとがき

闘譜篇

60年	
3月	三井・三池闘争始まる
4月	韓国学生革命・李承晩打倒
5月	安保反対闘争・全国的に激化
6月	15日、国会突入実力闘争
	樺美智子虐殺される
10月	12日　浅沼社党委員長、右翼テロにより刺殺
	大島渚「日本の夜と霧」上映禁止
61年	
5月	韓国軍事クーデター
6月	民社党、政暴法強行採決
7月	韓国、朴軍事政権成立
8月	渋沢訳サド「悪徳の栄え」発禁
62年	
5月	大学管理制度改正が提唱され、大管法闘争始まる。
4月	米原潜寄港反対運動始まる
11月	2日、南ベトナム軍事クーデター
	23日、ケネディ大統領暗殺
5月	日韓両学生、日韓条約反対闘争を展開し始める

62年	
7月	京都産業大学設立を発起（荒木俊馬・小野良介他24名）
63年	
5月	京都営林署に現在（国有）地の払下申請
64年	
5月	東山学園長藤原弘道、大学設立に参加・東山学園と提携
9月	文部省に経済・理学部の設置認可申請書提出
11月	文部大臣より大学設置許可の内諾、第一回生募集開始
65年	
1月	正式に学校法人京都産業大学認可
	初代学長・理事長に荒木俊馬
2月	第一回一次入試を東山学園で実施
4月	第一回入学式を京都会館で実施
5月	学生サークル活動を開始する
	予算要求から自治会準備会出来る
	学志会（後、志学会に改名）千葉執行部誕生
1月	制学式を行なう
66年	
3月	第二期工事（電子計算機センター等）完了
4月	第二回入学式
	理事会で三学部増設を決定
5月	志学会選挙・宮崎執行部誕生
7月	文部省へ法・経営・外国語学部の設置申請書提出
11月	第一回神山祭「創造期における我々の現実と役割」
6月	韓国学生デモに対し戒厳令
10月	東京オリンピック開催
11月	自民党総裁に佐藤栄作
65年	
1月	佐藤首相訪米
2月～11月、	日韓条約阻止闘争激化
5月	ベ平連発足
6月	日韓基本条約正式調印
8月	反戦青年委員会結成
9月	30日、インドネシア軍事クーデター
66年	
1月	早大闘争激化：以後高崎経大・法大・中央大・明大・横浜国大等で闘争続発
2月	日共、反中国キャンペーン開始
7月	1日、仏・北大西洋条約軍事機構離脱
8月	中国文化大革命激化
11月	建国記念日政令公布

林語堂招聘

67年
1月 文部大臣より三学部設置認可
〃 第三回入学式
〃 第三期工事（理・外語・学生BOX等）完了・落成式に岸信介出席
5月 桁木会中心に志学会リコール運動
志学会選挙、浜野（桁木会）執行部誕生
8月 台湾輔仁大学と姉妹校調印
1月 第二回神山祭「混迷する現代に指標を求めて」
途中吉田茂の追悼式行なわれる。
トインビー招聘
暴力事件に関し27サークル・5クラスで糾弾決議。学生課決議文貼付を禁止す

68年
4月 第四回入学式
5月 第一回学外発表会（京都会館）
志学会選挙に向けて反石翼連合戦線結成
6月 志学会選挙・岡本執行部誕生
10月 ハートマン・カーン招聘
10月 18日全共闘設立準備連絡会議結成
21日、国際反戦デー大阪斗争でK君不当逮捕

67年
2月 第二次佐藤内閣発足
4月 都知事に社共のミノベ当選
6月 佐藤韓国訪問
7月 防衛二法改正案強行採決
9月 佐藤第一次東南アジア訪問
10月 8日、佐藤訪ベト阻止、才一次羽田闘争、山崎博昭虐殺
21日、国際反戦デー闘争全国で展開
11月 12日、佐藤訪米阻止第二次羽田闘争
由比忠之進焼身自殺で抗議
15日、日米首脳会談「佐藤－ジョンソン共同声明」発表

68年
1月 19日、エンタープライズ佐世保入港
学生戦線佐世保現地闘争
23日、プエブロ北朝鮮で捕獲
東大医学部無期限ストに突入
2月 20日、金嬉老事件
3月 三里塚国際空港建設阻止闘争激化
王子野戦病院反対闘争激化（～4月）

11月 6日、代議員会で「処分撤回動議」決議
第三回神山祭「見つめよう現実を、高めようその声を、未来に向って歩み出そう」
文部省へ経済、理学部大学院設置申請書提出

69年
1月 18日、東大法研闘争でK・M両君逮捕される
25日、宇ヶ池日米会談阻止闘争に際し、大学当局・右翼厳戒状態に入る
27・28日、右翼、志学会本部を封鎖し、中執十数名を監禁・暴行
31日、右翼封鎖派・大衆会見、荒木以下当局者出席
2月 12日、右翼封鎖派学生大会強行、途中退場し、三百名で上賀茂抗議集会
15日、第一回自主講座「日大闘争に学ぶもの」
4月 第五回入学式
23日、第2回自主講座「闘いの総括と展望」
28日、沖縄デー闘争、東京・京都で産大生四名逮捕される

5月 日大闘争全学的に展開
仏・五月革命
7月 東大安田講堂再封鎖、東大闘争全学的に展開
8月 23日、ソ連東欧軍チェコ侵入
10月 21日、国際反戦デー闘争、全国で激化
新宿米タン阻止闘争に騒乱罪適用
11月 22日、東大・日大・全国学園闘争勝利集会

69年
1月 18・19日、東大機動隊導入、安田講堂闘争
〃 神田解放区〃闘争
2月 新宿西口でフォークゲリラ活動開始
14日、京大代議員大会で民青と激突
3月 30日、三里塚測量阻止斗争
4月 28日、沖縄デー闘争全国で激化、全国で[illegible]名逮捕される
5月 27日、日米会談のため愛知渡米、訪米阻止闘争
6月 9日、伊東ASPAC阻止闘争
10日、南ベトナム臨時革命政府樹立
15日、6・15集会、新左翼全国で一〇万結集
8月 5日、大学立法強行採決される
7日、大阪で〃反博〃開かる
9月 5日、全国全共闘連合結成。山本議長逮捕される

5月 7日第三回自主講座「合法と非合法」
8日、東大闘争参加のK・M両君に対し、退学処分告示
15日、処分撤回学内集会三百名結集
23日、東大路闘争でT君逮捕さる
30日 処分撤回要求し三名坐り込
6月 2日 再度坐り込抗議
第一回文連祭「渇き」
9日 伊東ASPAC闘争で三名逮捕さる
7月 産大ベ平連〝反博〟準備
8月 7〜11日、大阪城公園で〝反博〟、ベ平連を中心にして参加
10月 10・21産大実行委結成
20日 学内情宣
21日 10・21三条河原集会、百名結集
・ 東京・京都でF・M両君逮捕さる
11月 第四回神山祭「勇気ある対話の中から新しい光を」
5日、大菩薩においてM、A両君逮捕さる
13日 学内集会、デモ、二百名結集
22日 反神山祭六十名結集
同大にてS君逮捕さる

21日、京大封鎖解徐阻止闘争
津本思雄君焼死
10月 10日、全共闘・反戦青年委・ベ平連統一行動展開
21日、国際反戦デー闘争全国で激化
東京を始めとして各地、戒厳令状態
11月 5日 大菩薩事件
13日 佐藤訪米阻止決起闘争 全国で展開
大阪で糟谷孝幸君虐殺
17日、訪米阻止羽田現地闘争激闘
12月 14日 佐藤・ニクソン会談「日米共同声明」に抗議表

12月 12日 学内集会、デモ、百五十名結集
23日 「闘いの譜」発刊アッピール

70年
1月 16日 大菩薩事件等に関してM君に対し退学処分告示
2月 16日 10・11月闘争に関してF、M、S、S四君に無期停学処分告示
17日 産大救対準備会結成
4月 26日 沖縄デー闘争、上賀茂集会に対して右翼妨害・弾圧
5月 14日 米帝カンボジア侵攻弾劾闘争
23日 討論集会(於D大)開催、二十余名結集
29日 全国学生ゼネスト京都闘争
6月 7日 産大六月闘争実行委結成大会、数十名結集
12日 全関西統一行動に六闘委三十名結集
第二回文連祭「アンチ・コンベアー」
14日 産大独自市内街頭デモ、三十余名結集
15日 6・15反安保闘争
19日 北部大学共闘
22日 仏大集会に右翼殴り込
23日 反安保全京都円山集会に産大生百数十名結集

70年
1月 8日 沖縄全軍労四十八時間スト貫徹
15日 第三次佐藤内閣
2月 25日 日大全共闘のビラ配布に右翼暴行、中村克己君虐殺
3月 15日 万博始まる(全入場者数六四〇〇万)
18日 カンボジア軍事クーデター
31日 赤軍派「よど号」乗っ取りに成功
4月 28日 沖縄デー闘争各地で激化
新左翼十二万を結集
30日 米軍カンボジアに侵攻
6月 1日 反安保闘争最高揚期に入る
14日〜22日 全共闘、反戦青年委、ベ平連十数万を結集して連日反安保闘争を貫徹する
23日 日米安保条約自動延長
24日 民主化闘争中の拓大、ロックアウト
7月 23日 小西反軍裁判、初公判、支援闘争
8月 10日 拓大、闘争展開中の臨時中執十八名に処分
9月 出入国管理法案再上提に対して阻止闘争の取り

26日　反安保闘争総括集会（D大）
（五・六月闘争中、東京・京都で産大生七名逮捕される）

9日　6月反安保闘争に関してS君に無期停学処分告示
産大救対、獄中のM君のアッピール・総括文集を印刷配布

参照資料
「明日への葬列」合同出版所収年表

組み高揚

68年1月27日午後3時頃、右翼暴力学生集団数十名は、7号館4階にある志学会室をベニヤ板等で封鎖し隣接の新聞部室から壁を破って出入口とし、志学会中執メンバーを監禁した。当時、志学会は、国際会議場で行なわれる「日米会談」の粉砕行動の拠点に産大が設定されているとの情報に踊らされ、〝反トロキャンペーン〟を積極的に展開中であり、大学当局はその時期を逸することなく学内の民主化への闘いを圧殺することを目論んで敷地全域に二重の有刺鉄線で囲み、鉄製の校門、坂途中にパイプと有刺鉄線で移動式バリケードを急造し、主要地点にサーチライトを配備し終っていた。

68年6月に成立した岡本執行部は、学内の反右翼統一戦線と呼べる選挙体制の中で右派候補を大巾にリードして当選したのであるが、執行部を形成する段階で〝トロッキスト排除〟を原則としてセクト主義を露骨にしつつ、低迷した諸要求運動を進めていた。67年10月の10・21闘争において御堂筋で逮捕されたK君に関する処分撤回闘争に見られるような左右のズレ（白紙撤回―一条件闘争）を示しつつ、右翼勢力と対決すべき大衆運動一つ創出出来ずにあった岡本執行部に対して、右翼諸団体は学園祭の成果（学生運動の鮮明・中国物産展・討論会etc.）や、真に闘う学友による非合法のビラ、ステッカーによる果敢な情宣活動によって産大の問題点が明確にされ、広く闘争に決起する必要が訴えられ、その実践的行動の結果として、10・21闘争や東大闘争に多数の参加者と逮捕者を出すという状況に驚くと共に、左翼陣営の弾圧の第一段階として岡本執行部監禁→崩壊を断行した。

岡本委員長以下、二十名近くの中執メンバーを監禁し、暴行を続けた右翼集団が組ったのは、執行部の略奪であり、その証明として、執行部メンバー一人一人に〝転向証明〟ともいうような〝確約書〟への署名を強要した。

確　約

月　日学園の赤化運動に働く学生活動家追放を目的とした学園正常化学生会議の会談によって私達志学会常任委員会一同はこれまでの大学赤化活動の一連と大学当局の真意を誤まり報道した事に関して自己批判の精神をふまえて学園赤化活動学生追放闘争のなかで展開された学生全てに対して次の通り確約致します。

第一項　今までの全ての学園赤化活動を認めると

ともに全学友に対して大学当局の真意をまげて報道したことに強く自己批判する。

(イ)私達志学会常任委員会（学園赤化活動学生）とその協力したる関係者一同は第三回神山祭において志学会の名のもとに神山祭を赤化運動の手段としたことを認め強く自己批判する。

(ロ)学園赤化活動の為に全ての学友の校費を乱費した事に対して強く自己批判する。

(ハ)完全なる学生自治会を確立する為には今後一切学園赤化運動の活動家学生が学生の公けの役員になる事を不当とし現志学会常任委員、これに協力したる活動家学生をも同じあつかいとすることを確約する。

第二項　今回本学において三派全学連の侵撃に対して私達志学会常任委員及びその関係者一同の責任を痛感するとともに強く自己批判する。

(イ)その為私達学園赤化活動学生は民青（日本共産党組織）手帳を持った学生が関係していた事実を認め全ての学園赤化活動学生の組織を解散し再び組織しないことを確認するとともに学園赤化活動を行なわないことをここに確約する。

(ロ)私達志学会（学園赤化活動家学生）は、学園に配布された無記名のビラに対して何等処置をこうじなかったことを強く自己批判する。

(ハ)私達（学園赤化活動家学生）は、今回の三派全学連の本学侵撃に対する一連の問題は民青全学連と三派全学連の勢力争いであるとともに本学赤化を目的とする行為であることを確認する。

第三項　私達志学会常任委員会（学園赤化活動学生）とその関係者の全ては　月　日をもって本学々生全ての組織に関する役員を辞職することを確約する。

第四項　私達志学会常任委員会（学園赤化活動学生）は今後の志学会再建に関しては一切関与しないことを確認する。

以上四項目の確認をするとともにここに私達全員の署名する。

昭和　年　月　日

（原文のまま）

事実経過

一月17日

出所不明の「学内バリケード封鎖」というビラが学内に大量に配られ、学内が緊張した空気につつまれた。

一月24日

大学当局は校門を急造し、バリケードを構築し大学周囲を全て有刺鉄線でかためた。この頃より学友の間にも27、28日に「反代々木系全学連が産大を占処し日米会議が行なわれている京都国際会議場を粉砕する」という流言が乱れとんだ。それに対して志学会執行部は「トロッキスト＝暴力学生集団から産大を守ろう」というスローガンの下に反トロキャンペーンを展開した。

一月27日

志学会執行部が泊り込み態勢をとる。午後二時志学会執行部代表三名が「暴力学生集団から産大を守る為にという名で学長に対して全学集会を開かせて欲しいと要求したが拒否される。午后三時右翼暴力学生約四十名が、ヘルメット・木刀・角材・日本刀等で武装し執行部を襲撃。室内に居た志学会執行部十七名（うち女子二名を含む）を監禁・リンチを加える。そのリンチは一人を五、六人が取り囲み、木刀・角材などで背中・首・腹をなぐる、足げにする等で、そのうち一人の学友は気絶したにもかかわらず水をかけられて校医を呼び手当をした後、再びリンチを繰り返すといったあり様だった。その学友は今だに入院中である。右翼暴力学生、体育会系一部学生約五〇〇名泊り込む。志学会執行部一名の下宿を右翼学生が捜索し、資料、書類を持ち去る。

一月28日

午前四時、監禁した全員から「志学会を赤化運動に利用した」という確約書を暴力的に取る。午前九時、登校する全ての学友に対してバリケードを利用した、右翼暴力学生による不当な学生証の検閲を展開する。午后八時、監禁され続けられていた全員が釈放される。

一月29日

右翼暴力学生は立看を出し、志学会執行部の赤化運動を許した大学当局への自己批判要求を出しつつ、31日に大衆会見を開き、赤化運動の事実を暴露し、自らの暴力を釈明すると発表の応援団・放送局・新聞局・文連・体連による五者会議と称するものを結成する。

1月31日
大衆会見開かれる。志学会執行部全員欠席、出席者約八百名（そのうち体連・文連動員約五百名）「石翼暴力学生の暴力をやむを得ない」という方向に引きずられ、大学当局も事実を隠蔽し、自治圧迫をはかる。五者会議より十日以後に全学集会が提起される

2月1日
下鴨署リンチ事件の噂を聞き、調査開始する。

2月2日
ブル新、マスコミ等で今回のリンチ事件報道される。志学会執行部一名はブル新記者会見で、自分達は「反代々木系、代々木系のどちらにも属していない」と発表する。（日名書記長）

2月4日
リンチを受けた四回生二名は弁護士六人をたて下鴨署に石翼暴力学生のリンチ事件を厳重処分する様に告訴。又執行部岡本委員長は、京都地方法務局人権擁護課に対し、登校の際石翼暴力学生の暴力から、大学当局は身の安全を保障せよと訴えを出す。

2月8日
大学当局は1月27、28日の泊り込学生に対して

はなく、産大の左翼総体に対する全面的攻撃であると把握し、直ちに学内・外における反撃の戦列を組織した。それは大衆会見や、一方的全学集会を強行する大学当局・石翼暴力派、六者協議会等を作って本質を隠蔽する役割を演じた秩序派、暴力に動揺しつつセクト主義と合法主義を固執する執行部派などの中にあって、唯一闘いの方向性を明示したものであったが、後期試験→春季休暇と続く期間の間に、遂に流動化状態を作り出すことが出来ず、大学当局のバックアップの下、石翼秩序派によるなしくずし的な自治会掌握を許してしまったのであった。

京都産大生は訴える

市民・労働者・学生の皆さん！
私達はいま弾圧と屈辱の中からひとつの小さな叫びを起こそうとしています。
新聞等で発表された様に1月27日・28日に寝泊り大学当局が指令画策した石翼暴力団学生が木刀・角材・ツルハシ・日本刀等々を持ち自治会室に乱入占領し、自治会役員及び民主的な学生を登校したとたんに捕え、連行して暴力リンチを加え脅迫し30時間余りも監禁して全員に傷を負わせて解放

「試験結果の考慮を、追試実施等」の石翼暴力学生を優遇する学長告示を発表する。十二日に全学集会開催発表される。

2月9日
往復葉書で全学集会への参加呼びかけ全権委任と、六者協議会設立を策す。

2月12日
六者協議会主催の下に「全学集会が開催され、石翼的方向での収拾が図られる。「現志学会執行部解散決議」「六者協議会自治代行」等が一方的に決議される。議長不信任動議をめぐり、議事の反動性に怒った学友約五〇〇名が退場し一〇〇名の結集をもって上賀茂神社集会を開催する。2月15日京大集会提起さる。

第一回自主講座レジメより

この事件以前、68年10月に反代々木系諸セクト及び先進的ノンセクト学生によって全共闘準備会が結成され、K君不当処分撤回闘争等を推進していた。69・1・18、19の東大闘争において、産大の学友が逮捕されたことを知った全共闘準備会は、予想される大学当局の政治的処分に対する先制の攻撃準備に取り組んでいたが、この石翼暴行事件を、単に岡本執行部に対する弾圧で

その間、大学当局は被害者宅に『学校の用事で泊まりますので心配なく』と電話連絡をし、また私達は幾度も大学当局に救出してくれる様に頼みましたが、そんな事はないとシラを切り「お前の名前を言え！」と脅す有様である。そしていまなお一部の者は重傷で入院しており、再度のリンチが予想され登校できません。
検閲制度で縛られ！ 集会・言論・出版の自由がなく！ 政治活動はできない！ かろうじて嘘虚で身を守っています。私達は口を眼をそして耳を奪われ、そして手を足を奪われています。
しかし私達はこの事件を絶対に許すことはできない！
市民・労働者・学生の皆さん！
私達京都産大生のこの小さな一つの叫びを見守って下さい。

京都産業大学　全学闘争委員会

1・31大衆会見・2・12全学集会の欺瞞性を暴露する!!

去る一月31日、学園正常化会議と称する学生の主催によって、大衆会見なるものが行なわれた。即ち右翼暴力集団によって行なわれた、あの一月27・28日の志学会に対する集団リンチを、学校当局との合意によって右翼暴力集団の露骨なる陰謀集会に対して、〝否〟と言う声を叫ぶべきであったのである。全学友諸君!! そうすれば容易に、学校当局と右翼暴力集団の淫猥な腐れ縁がはっきりと写しだされ、聞えてくるだろう。しかも右翼暴力集団と本質的に何の変わりもない五者（体育会文化団体連盟・放送局・新聞局・応援団）は、学友を巻き込んで六者と称し、一月27・28日の集団リンチ事件に対する全学集会を2月12日に行なおうとするのだ。圧倒的・民主的学友はこの全学集会を、一片たりとも認めることは出来ないはずだ。なぜなら、志学会に対して集団リンチを行なったのは一体だれだ!! そしてそれを公然と認め、なお指導していたのは一体だれだ!! そしてまた、日頃、民主的学友を弾圧しているのは一体誰だ!! 答えよう! それは右翼暴力集団であり、学校当局なのだ! 全て明らかなのだ。全学集会において、右翼暴力集団と学校当局が何を目論んでいるのか! すなわち、あの右翼暴力集団の志学会への集団リンチを正当化しようとするものなのである!

全ての学友諸君!!
今こそその堅く結んだ口を開いて
全学集会における全ての決議を
〝否〟と言う叫び声で葬り去れ!!

東都産業大学　民主化闘争委員会

告示

経済学部第四年　千葉　仁
仝　文栄反産
仝　稲葉茂造

右の者学則第五十三条により無期停学に処す。尚去る二月十二日の全学集会において決議された暴力に関する処分の全部については目下呼出し調査中であるが呼び出しに応じない者もあり、調査がおくれている。近く調査終了次第告示する。

経済学部第三学年　岡本光治
仝　第四学年　浜田　勉
法学部　第三学年　日名泰之

右の者志学会運営に関し、一般学生に不安と疑念を与えたことは遺憾であり、当分の間家庭謹慎を命ずる。

尚、去る二月十二日の全学集会において決議された志学会問題に関する処分については関係者を呼び出し調査中であるが呼び出しに応じない者もあるので調査がおくれている。調査終了次第告示する。

昭和四十四年二月十七日

学　長

（注・ここに言われている調査結果なるものは何一つとして発表されていない）

II

京都産業大

二人を退学処分
東大闘争に参加の学生

【京都】京都市北区上賀茂本山、京都産業大学（荒木俊馬学長）は、東大の安田講堂事件に参加した学生二人に「社会、人心に不安を与えた」として八日付で退学処分にする、と九日告示した。他大学の紛争に参加した学生が、在学する大学から処分を受けたのは珍しい。二学生は十日、同大学の反代々木系学生や弁護士らと〝戦術会議〟を開いて、処分撤回闘争を始める構えを見せている。

処分を受けたのは法学部二回生、林谷純一君（二一）と経済学部二回生、小谷章司君（二〇）。二人は一月十八日、東大の安田講堂付近の攻防戦で公務執行妨害、不退去などの容疑で逮捕された。

小谷君は起訴されたが、公判では「反省組」にはいり、東京地裁で懲役一年六月、執行猶予三年の判決を受けた。一方、林谷君は逮捕のさい負傷し、警察病院に入院したあと釈放されたが、三月九日京都市右京区桂木ノ下町の自宅で再逮捕された。東京地検で調べを受け、三月二十日、処分保留のまま釈放されている。

同大学では、三月初めから二人について事情調査をした結果、同月十四日、自主退学をすすめたが、二人ともこれを拒否したため退学処分に踏切った。

同大学は「学生生活に関する規則」で「教育基本法に基づき、いっさいの政治活動を禁止する」などきびしい規定を設けており、告示文で荒木学長は「この処分がきっかけで学園紛争が起れば、

きびしい処分で臨むと述べている。
（69 5/10 朝日新聞・朝刊）

69年5月、自治会破壊事件糾弾を軸にした産大民主化闘争を、十分に発展させえない状態にあった全学闘（全共闘準備会より発展）は、東大闘争参加者退学処分に対して〝処分白紙撤回〟のための闘いを組織した。言うまでもなく、この〝処分〟は、単に学則違反とか、学籍の剥奪とかといった次元ではなく、東大闘争を頂点とする全国学園闘争それ自体が産大の存立を根底から否定するものであり、その闘いの質の波及を恐れた当局が、暴力的に弾圧したすぐれて政治的な処分であった。全学闘に結集する学友は「自主講座」や戦術会議・総括会議の中で、我々が克ち取るべき方向性の確認と、何よりも主体としての自己の思想性を強固にしつつ、産大学内で始めての非合法直接闘争を展開した。それは二度にわたる〝座り込み抗議行動〟と〝5・15抗議集会〟の実現であった。学生課員を始めとする大学職員と右翼の妨害の中にあって、とりわけ〝5・15集会〟は長時間に渡って数百の学友を結集して持たれたが実質的に〝討論集会〟の域を突破することが出来ず広範な学友の怒りの声を集約しつつ全面的な闘いに突入すべき時期を失なった。

闘いのためのアピール

なぜ東大闘争に参加したのか（東大闘争の意義）

今全国で闘われている学園闘争は、まさに東大闘争をふまえ、更にそれを乗り越えた地点で闘われている。帝国主義的再編を強固に押し進めている現資本主義体制下における東京大学の位置づけとして、体制の根本を形成している所の官僚制度への人材供給を目的として創設された過去の東京帝大の理念をそのまま受けつぎ、今も帝国主義への根本的人材を養成して、その意味で全国の大学の頂点に立っている東大を闘いの砦として変革していくことは、必然的に全国大学闘争の方向性をはっきりと示し、又、対権力、対体制へ向けての闘争の突破口として、全国大学闘争を単に個別学園闘争としてとらえず全人民的に連帯した闘いを切り開いてゆくのである。

我々はまさにこういった点をふまえ、産大の闘争をになってゆくにあたって単に産大を個別学園闘争への展望性は必然的に産大闘争の展望性と結びつくといった思考を具象化し東大闘争へ参加した訳である。

なぜ処分は不当なのか

我々は今度五月八日付で東大闘争に参加し、公共物を損壊し社会に不安を与えたという理由で、学則（第何条かは示されていない）並びに誓約書によって処分された。その処分の不当性を暴露するにあたって、まずそういった処分を出す産大の現状を根底的に見抜かねばならないと考える。第一に建学の精神にも見られる様に産大は産学協同路線をとっている。産学協同路線は体制に経済的に従属している今の産大を明確に表わしている。本来的な学問は、結果的に人民の為の学問であるから学問をする過程において産学協同路線という（ワクの中に押し込め、我々から真の意味での学問を奪取し、専門知識を植えつけるのみである。専門知識を植えつけるというのは個別専門化を作り出すという事であり、必然的に我々から全体的な視野を奪うという事である。全体的な視野を奪うという事は社会の中で単に個別専門的能力＝歯車的役割しか果さないロボット人間を生み出すという事であり、そういった意味で産大は単なるロボット養成所であり、学問はない。第二にそういった路線を押し進めてゆくために、必然的に起りうる大衆の蜂起を予想しての支配＝弾圧の暴力である。これらにいたっては、政治活動の禁止、検閲制度、偏向教育等に見られる様に人間性無視もはなはだしい。あえてここで不当性を書き連ねる必要性もないだろう。

この様な産大の現状をふまえたうえで処分の不当性を暴露したい。言うまでもなく人間は生まれながらにして思想及びその思想に基づいたところの行動の自由は、保障されており、又保障されるべきものである。なぜなら、人間は人間が生きている社会状況及び環境によって生成変化発展するものであり、種々な矛盾をはらんだ存在としてその社会的矛盾を解決すべきものだからである。ところで我々はそれらの問題を解決するための前提として当然のことながら我々の所在している大学において前述したような事柄が保障されていなければならないのである。もし、そのようなことがな

ければ、大学は大学としての社会的存在（責任）を吾々することは不可能である。又その思想に基づいた行動についても、その規制が一たん、一思想の暴力的排除として現象した場合はいかなる場合であろうと断じて認められるべき性格のものではなく、憲法がそれをひんぱんに認めた場合、我々はそういった憲法についても叫弾しなければならない。又学校が単に現象（＝法律違反）のみをとらえ、その行動の本質（本質をとらえてみても学校は政治的な活動禁止の条項をもって処分するであろうが、前述したとおりこれも全くナンセンスである）から理解しようとしない姿勢を徹底的に我々は抗議し、弾圧の為でしかありえない学則でもって行なわれた処分を全く不当と判断し、ただちに処分白紙撤回を要求するものである。又我々は処分という行為に含まれるところの。検閲制度の撤廃、。集会・結社の自由を勝ちとらなければならないことを強く訴えるものである。

大学治安立法粉砕！
中教審答申粉砕！

処分撤回闘争委員会

京都産大生すわり込み
処分撤回など要求

京都市北区・私立京都産業大学（荒木俊馬学長）の教養部構内で二日午前十時すぎから、同大学の反代々木系、ノンセクトの学生約十人が、学生処分の撤回、学則の改善を要求してすわり込みをした。

学生らは東大安田講堂事件に参加した同大学の学生二人が五月八日付で退学処分になったのを含め、学生運動で四人が処分されたのは不当であり、さらに学則でビラまきや集会が制限されているのを改善せよとの抗議文を地面に敷いて訴えた。

すわり込みの学生らは四日午後、上賀茂神社で抗議集会を開くと呼びかけている。

（69・6/3　朝日新聞朝刊）

70年安保改定期を一年余に控えた当時は、愛知訪米阻止羽田闘争、ASPAC会談粉砕伊東闘争、6・15安保粉砕闘争、京都の地においても京大・立大を中心にした街頭闘争が次々に提起され、全学闘は京大Cバリ内に〃場〃を確保していたことも関連して、次第に諸政治闘争にその力量の大部を注ぐようになっていったのである。そして、学内において情勢を切り拓けないままに、致命的な障害である長い夏季休暇に入ってしまったのであった。しかしその期間も休息を貪っていたのでは決してなく、秋の闘いの爆発的高揚を果すべく、産大の闘う学友は種々の戦線の最先端で活動を続けていたのである。

Ⅲ

69年9月～10月、全てのセクト・集団・グループが70年安保闘争の結節点として設定した10・21も11月佐藤訪米阻止に向かい、全力量を傾注した態勢作りに入り、事実上産大全学闘は解散した。しかし、産大の闘う学友は諸セクトや各戦線に分散してしまったのではない。激烈な政治闘争を闘い抜く中でしか、真の「産大闘争」は提起出来ないのであるし、もはや「個別学園闘争」として完結していくのは許されない、との認識を前提にして、産大の全先進的学友は一つの闘う場を設定していった。それは「10・21闘争産大実行委」であり、10月初旬に諸セクト・グループ・個人によって結成されるや精力的な情宣活動を展開した。10・21には二十余名の学友が学内において公然と情宣ビラを数千枚配布した。石翼学生の注進によって、周章して駆けつけた学生課職員・石翼学生の妨害と威嚇を一切ハネ除けて、その情宣活動は貫徹されたのであった。しかし提起された当日の〃10・21学内総決起集会〃は大学当局・石翼・権力一体となった厳戒状態に直面した。集会場所に設定した、3号館前広場の周囲・教室内外には大学の教職員が残らず狩り出されており、石翼集団は木刀をはじめとする武器を携えて要所を固め、更には権力の私服まで導入されており、我々と石翼の衝突を待ち望んでいることが分るに至って、我々の決起に期待している少なくない学友の視線を重く感じながら〃学内集会〃の中止を決定していったのであった。

全面的激突による勝利によって、石翼を敗退させ、大学当局と権力一体になった弾圧体制と対決するだけの力量がなければ学内集会さえも貫徹出来ないのだという、自明の結果が露呈された。この経緯を痛苦なまでに自己批判しつつ、実行委の旗の下に結集する産大の先進的学友百余名は、三条河原で、総決起集会を開き、学内における屈辱的事態を新たなる怒りと、更なる闘いの決意へと変え、大阪・京都の最先端で闘い抜いたのであった。

全産大生は10・21反戦反安保斗争に起て！

巨大なる進撃の烽火をあげよ！

10・21反戦闘争産大実行委員会

京都産業大学の全ての学友諸君！

一昨年、十月八日の首相訪米阻止を期した羽田現地闘争を一つの結節点として、反戦・反安保・沖縄闘争は明らかに新しい闘争の質と方向性を獲得し、全ての階層を巻き込みつつ、全国的な激動を現出している。

他方、日大・東大を頂点として噴出した各学園闘争は、単に個別学園闘争に留まることなく、学問・教育の存在姿勢そのものを告発し、闘争主体としての自己を不断に問い続けつつ、今や教育をも帝国主義的再編下に置こうとする支配階級〃権力〃そのものに肉迫する全面的かつ非妥協的闘争へと深化しつつある。

今まさに取り組まんとしている10・21反戦反安保闘争は、67羽田、'68佐世保、10・21新宿騒乱、'69東大〃安田講堂〃、4・28沖縄と激闘を続けたこの二年間の諸闘争の質を正しく引き継ぐだけでなく、70年安保改訂期における一大高揚期としてある今秋の反安保・沖縄闘争の結節点であり、十一月佐藤訪米実力阻止闘争の爆発を期しての第一次攻勢としてあるのだ。70年安保粉砕・佐藤阻止に向って怒濤の進撃を始めなければならない。

10・21闘争・羽田闘争に総決起せよ！

10・21反戦闘争勝利！

11月佐藤訪米実力阻止！

沖縄闘争勝利！

70年安保粉砕！

全ての学友諸君！

言うまでもなく、京都産業大学は、「産学協同路線」を建学理念として掲げ、関西財界と、自民党タカ派のテコ入れのもとに、関西における最大の右翼反動拠点として設立されたものである。それゆえ、その要請されているところのものは、右翼反動思想の吹き込み、中級労働者の大量育成、体制維持思考の強要であり、それを実現するために大学当局は、極端な偏向教育とマスプロ講義を行ない、一方においては検閲・許可制によって一切の自治活動を規制し、更には言論・出版・政治活動の自由を認めないという有形・無形の締めつけを行なってきているのである。

本年一月「日常的な諸要求実現」を御題目のように唱えるだけの『民主的執行部』を一昼夜に及ぶ監禁と集団リンチで破産させた極右暴力集団と右翼秩序派と、それを裏から教唆した大学当局は全く欺瞞的な「六者協議会」をデッチあげ、更にその支配体制を強めるため〃自治会規約〃一方的

に決定し、大学当局と右翼集団（折木会、現代法制研究会、考古学部etc）のカイライ執行部たる「馬場執行部」をハレンチにもデッチあげてきたのである。そして現在、大学当局は有刺鉄線を正門前はおろか校舎の周囲全てに張り巡らし、登校路にバリケードを準備するという、なしくずし的な〃ロックアウト体制〃をしいて厳戒体制をとっている。理事長の小野某に「もし学内に入ったら殺してもかまわん。私が責任をとる」（'69・1/27・夜）と言わすまでに恐怖されているものの実体は何であろうか。これこそ我々と共にある多数の闘う学友の存在であり、それを支持する多くの学友諸君の存在に他ならないのだ。

我々はこのように反動の極にある京都産業大学が、帝国主義的支配の教育界における突出部であり、産大闘争の内実が決して「個別改良闘争」や「要求実現行動」などではなく、深く反権力＝政治闘争と一体のものであることを再度確認しなければならない。今こそ、叛逆の烽火を高々と掲げる時だ。

産大反動体制打倒！

産大闘争勝利！

紅旗 第16号'69・10・17 産大反帝反修学生戦線

10・21全学総決起集会に結集せよ!!

各クラス・ゼミ討論をもって総決起せよ！

全産大の学友諸君！ 我々が四年間の屈辱の歴史に終止符を打つ時が近づいている。荒木・小野体制は、自ら消滅することはありえない。

アメリカ帝国主義、日本帝国主義、ソ連社会帝国主義、日共修正主義等は、自ら進んで、歴史の舞台をひきさがることはありえない。

「すべての反動的なものは、倒さないかぎり、倒れはしない」（毛沢東）

学友諸君！ 現在、我々の目前には、荒木・小野体制（＝帝国主義教育体制）や、右翼（暴力派＆秩序派）そして民青（＝日共修正主義）が存在するが、我々は、それに対して明確に一線を画し、彼等を完全に、徹底的に消滅するまで持久的に闘いぬこう！

現在、右翼（＝大学当局）は、十一月の神山祭を、右翼反動イデオロギーの場として、策動している。且つ、現志学会執行部もまた大学当局によ

って天ッチあげられた〝カイライ〟以外何物でもない。我々は、これら一連の行動を、認めることはできない。諸君！　このような〝モマン的神山祭〟を、我々闘う学友の手で粉砕しよう！

学友諸君！　我々は東大・日大闘争に始まる全国学園闘争の中で、闘う学友が切り開いた闘争から学ばなければならない。それは学園における個個の学園の特殊な矛盾や、諸要求闘争が、闘争の直接のきっかけであるが、これらの闘争を単なる学園内の問題にとどめず、日帝の支配下にある大学の本質をあばき出す非妥協的な闘争を闘う中ではっきりと日帝打倒へと方向づけて来た。即ち、日帝支配下の教育体制の下では学園の民主化や自治等は、絶対に勝ち取れない。故に、我々の学園闘争は、政治闘争として直接に、日帝打倒の闘争へと進まざるをえない。

学友諸君！　勇気をもって、大学当局（＝荒木小野体制）に対するあらゆる幻想を捨てて、犠牲を恐れず、各クラス、ゼミ討論に立ちあがり、その盛りあがった力でもって「10・21総決起集会」へ、更に「10・21大阪統一集会」へ結集せよ！

◎荒木・小野体制打倒！

◎産協軍協路線粉砕！

◎11月佐藤訪米実力阻止！

◎沖縄闘争勝利！

◎70年安保粉砕！

10・21闘争に決起した産大の先進的学友は、連続的な闘いを確固として闘い抜いていった。逆バリケード＝ロックアウト体制によって、ひたすら歴史の激動を受け入れず、反動の砦を守り抜こうと努力する大学当局＝石翼の警戒をものともせずに、非合法ビラや学内集会によって、我々の闘いの意義と産大生の決起を訴えていったのである。11・13の学内集会は、ナイフで参加者の着衣を切るような石翼のテロ＋弾圧体制を八ネ除けて「佐藤訪米阻止・安保粉砕・産大闘争勝利」を掲げて、集会とデモンストレーションを貫徹した。そしてこの学内の最前線の闘いと固く連帯しつつ展開されたのであった。

このような闘いが激化しているその中で、産大では「神山祭」が開催されていた。69年一月に自治会権力を奪取した石翼暴力＋秩序派がサークル活動をもその支配下に置こうと目論む石翼にとっての一大総括の場であった。このようなものでしかない「神山祭」に対し、闘う者のみが真に文化を、サークル活動を創造出来るのであるし、自分自身が何ものかに向って闘い抜

いている者に変る契機と総括の場にこそ「〜祭」はならなければならない、という主張を持って開催されたのが「反神山祭」であった。

反神山祭に結集せよ！

10・21全学ストを起点として全学友は立ち上れ

全産大の学友諸君！　遂に我々が反旗を振りかざす時が来た。

今年一月二十七日から始まる石翼及び反動派の策動は、今や学園祭＝神山祭という彼等の一大総括の時期にさしかかっている。ここで我々は1・27暴力事件とその背景そして数々の暴挙を今改めて論破しながら我々独自の行動を提起し、10・21（国際反戦デー）に連帯して石翼産大体制打破に結集すると共に11月の石翼秩序派の行なう「お祭り騒ぎ」を我々の力で粉砕しよう！

1・27志学会リンチ事件はまさしく大学当局と石翼暴力学生が結託して石翼カイライの志学会を樹立しようとするものだった。それは1・31、2・12の各集会を主催した六者会議そのものが暴力学生の作った七者会議の引きつぎに過ぎなく石翼と大学当局の陰謀によって成立したことは明らかである。そして6・20に開かれた〝全学集会〟は彼等〝の規約を通すのに利用したノミで事前に行なったへ公聴会〉は単なる意見陳述会で全く一般学生を無視したものでしかなかった。選挙も「バカの一つ覚え」で郵送投票を連発し、選挙管理委員も不明確なまま中央執行委員長選挙という喜劇をやり遂げた。

現中央執行委員長（会）も遂びでしかなく〝体制の中での改良〟〝ニューライト〟等々自己矛盾をあからさまにバクロしている。つまり我々の目前の目標は現産大体制の中で得られた矛盾を明確にするところから出発する。しかし現執行部はその矛盾すらも明確にできていない。

今行なわれようとする〝神山祭〟「勇気ある対話から新しい光を」は、彼等矛盾を明らかにできない者達が誰に向って勇気ある対話を求めようとするのか。大学当局に対する迎合的改良は全くのギマンでしかない。さらに今我々が各自神山祭というものに参加するということは、その体制を認める以上の何物でもなく、逆に援助者となり変わるだけなのだ。この中にあって〝神山祭〟に対し自発的に「反神山祭」のノロシを上げ行動でもって我々の意識を明らかにしようではないか。

10・21全学ストを提起し、石翼反動の産大体制の

中から、現国内体制に内在する大きな問題点を把握し戦う為にも、10・21全学スト、反神山祭は我々にとって大きな意義を見い出せることになろう。

産協・軍協路戦粉砕！

執行部粉砕！

神山祭粉砕！

10・21全学スト勝利！

京都産業大学反神山祭実行委員会　第一号

Ⅳ

10・21国際反戦デー闘争を突破口にして、10・11日闘争は気狂いのように弾圧して来る権力総体に向って正面から闘いを挑み、その闘いが苛烈であったがゆえにまた犠牲者も多かった。大菩薩峠事件や各派指導者に見られる事前検挙や大量無差別逮捕等、闘いの高揚に恐怖した権力はその持てる力を最大限発揮した。そしてまた権力と密着していることを証明するかのように、権力によって弾圧された学友に対して、大学当局は理不尽な処分策動を乱発してきた。処分を脅しの種にして自主退学を強要するような陰険な当局に対して我々は処分を出す産大体制そのものを告発しつつ、「処分白紙撤回」を要求していった。12・12学内集会は大学当局・右翼が唖然とする中をヘルメットを着用した隊列で、産大闘争の爆発を全ての学友に宣言し、転貸・右翼の暴行に抗しつつ、デモンストレーションを最後まで貫徹したのであった。

12・12処分制度弾劾集会を断固実現す

当局をさらなる反撃で震撼せしめよ！

「自主退学勧告」方式による学友の強制退学処分の陰謀を阻止せよ！

我が産大の全ての先進的な学友諸君！

10・21国際反戦闘争を国家権力＝機動隊による未曽有の弾圧体制をはねのけ、11月佐藤訪米阻止闘争、そして70年安保闘争の巨大な高揚を作り出すべく果敢に闘った二名の学友に対して、権力は不当な弾圧を加え、そしてまさにそれに相い呼応した形において、産大学校当局は、反政府闘争の学内への持ち込みを恐れるがゆえに、これらの学友に対して自主退学勧告という形での処分を強要してきた。我々はこれらの処分制度の反動的な本質を12月12日にその弾劾の集会を克ちとる中で、公然と明らかにしえたと思う。

すなわち第一にそれが、反安保沖縄闘争の明確な圧殺行為であるということである。「日米共同声明」表明されている72年沖縄返還にもとづき「極東の安全の維持」の名による実質的な安保の再編強化＝日本核武装化、日米共同作戦地域の極東全域への拡大を政府はねらっているのだということ。まさに「沖縄返還は核付基地自由使用返還であり、自衛隊の台湾、朝鮮への海外進出を可能にせんとする反プロレタリア的な帝国主義的野望なのであり、それに断固反対することは、基本的には全く正しいということである。第二に「処分」が産大の学生弾圧体制の一環として行なわれているということについてである。企業に対して最も都合の良い、もの言わぬヌケがラみたいな人間を作らんとする当局者の意図の一環として処分制度が存在しているのであり、当局の意向に反対する学生は次から次へと闘に葬り去り、一切の民主化の運動を合理的に抹殺せんとする産大運営機構の一つとしてそれがあるのである。我々はかかる処分制度に最も典型的な、荒木＝小野を頂点とした現行産大体制を根底から暴露し、一切の学生の自主的な活動に対する介入を阻止するものでなければならないであろう。そして第三に、学校当局の対応の仕方が全くもってバカげたものであるということである。つまり、我々が一つ一つの運動実践に、自らの主体的な立場をかけて行動している

という一つの人間の「生き方」に関する行為に対して、それが「学則」にふれるなどと称してその人間的な、そしてゴリゴリに形式主義的なものだということである。諸君、我々の生活に合わず、ひどいアナクロニズムに陥っている「政治活動の禁止」などというバカげた条文は、むしろ我々の手で「没」にしていこうではないか。我々にとって必要なのは、我々の屈辱的な事態に無関心にたることではない。かかる事態に対して眠り始めた感覚に再度目をさまさせ、自らの感覚をとぎすまし、はっきりと我々の自由を要求していくことである。

かかる立場にたって我々は、12日昼休みの学内における公然たる集会を提起したのであった。そして我々はその場において当局者達に対し、はっきりと「闘争宣言」を発することを敢行したのである。

我々は「政治活動の自由」を要求している我々に対して、まさに政治活動の禁止を定めている学則の許可を得てからにしろなどとわめきちらすにすぎない一部の学内右翼＝秩序派連中の一切の妨害策動をゆるさず、反安保沖縄闘争の、又産大闘

争のその政治的な意味を断じて明らかにすべくヘルメットをかぶって中庭に結集したのである。数百名の学友が見守る中にあって我々はその場において10数分間の処分制度弾劾の集会をかちとり、その不当性を公然と明らかにしつつ、種々の集会妨害策動がなされる中にあって、再度バスプールにおいて結集し、総括集会を行い、たびかさなる学友の処分を断じて認めず、一切の学友に対する処分の策動を粉砕することを確認したのであった。我々はこのような集会を今後も次々と克ちとることによって、我々の意志を全学的に明らかにしていかなければならないだろう。

70年安保闘争を目前にひかえた今日にあっては学校当局はますます我々に対して目を光らせざるを得ないであろう。しかし、いくら弾圧しても我々はその網の目をくぐってまさに生きぬくであろうし、安保闘争に向けての大衆的な決起は、彼等によって決して阻止されはしない。産大に一万名以上の学友がいるかぎり、我々は敵北することはないだろうし、除々に窮地に追いつめられるのは学校当局であり、又それに追従する一部の学内秩序派の連中である。我々はすみやかに、彼等に対して、その恐怖が終りのないものであることを教えてやらなければならない。たび重なるはそれに教唆する学友を結集させてきたのであり不当な、先進的学友に対する「呼び出し」はあらためて、それらの学友の闘う意志を強固にしただけであった。

全ての学友諸君！　我々は70年代へ向けてその持てる力を全面的に発揮しつつ、一切の力を産大荒木体制打倒へ向けて集約し、その呪縛から自らを解放せん！　一切の人間的な怒りを、産大闘争の巨大な高揚目指して爆発せしめよ！

処分制度粉砕！
自主退学勧告粉砕！
政治活動の自由を勝ち取れ！

京産大反戦学生会議（革マル派）

次に掲載するのは大学当局より教員に配布された、大菩薩峠事件に関する処分の理由書と、学生宣撫を指示した書類である。

このような書類を秘密裡に配布することによっても荒木を頂点とする大学当局者が、どれ程闘う学友の存在に恐怖しているかを知ることが出来るし、何よりも〝処分〟という重要な案件が〝部長会議〟の一方的裁定にまかせきってあり、教授会を始めとする一般教員

にも無関係に決定されているのがわかるだろう。我々は、弾圧体制の更なる純化と、緻密な管理体制を作り上げようとする荒木＝小野体制のあらゆる策謀と本質を暴露するための機能をも獲得しなければならない。

謹啓

教員各位には愈々御清栄にて御越年の御事大慶に存じます。

御蔭をもって大学の方は何事もなく、年末年始の休暇を終え、新年の授業開始を迎えることになりました、年頭に当り、あらためて日頃の御協力に対し厚く御礼申し上げます。

さて別紙文書によりお知らせいたしました如く大菩薩峠事件に加わったほか、各所の襲撃事件の一員として起訴された法学部第三学年森輝雄を一月十日付で退学処分にいたすことになりました。

同人処罰の件は、同じく大菩薩峠で逮捕された荒木久義（法学部第一学年・未成年者）とともに去る十二月十日開催の部局長会に付議され、慎重審議の結果、

「違反行為が明白であるから退学処分が相当である。しかし、本人の反省を求め、自主退学を勧奨することも考えられるので処分の時期等は大学当局に一任する」ことに決定をみていたものであります。

その後調査の結果、荒木久義は警察派出所襲撃のような事実はなく、また保証人および取調べ担当官より聴取したところによると本人も反省の色濃く、自主的に退学届を提出いたしましたので、これを受理し処分の対象から除きました。

森輝雄の方は、学校より関係者が自宅を訪問し、両親を通じて本人（拘留中）の意向を訊しましたが反省の事実が認められませんのでここに退学処分の止むなきにいたったものであります。

以上のとおりでございますので教員各位におかれましても事情御高承たまわりたく、ここに一般告示に先立ちましてお知らせ申し上げた次第であります。

本学は、幸いこれまで紛争もなく平穏裡に授学を続けて今日にいたりましたが四囲の情勢は、なお安易な楽観を許さないものがございます。

従来通り、一般学生に対しましては各種の機会を通じて愛情ある対話に努め、また改善すべきところは、これを一層推進してまいりたいと存じますが、一方本件のような非違者に対しては、きびしく対処いたしたいと考えております。このような

点については、御理解をたまわり、一層の御助言、御協力をいただきたく、ここに重ねてお願い申し上げます。

敬具

昭和四十五年一月九日

総長　荒木俊馬

教員各位殿
併史

昭和四十五年一月十日

総長　荒木俊馬

公示

法学部第三学年　森　輝雄

・この者は左記理由書のとおり、本学学生たるの本分に反する行為があったので、宣誓書ならびに学則により退学に処す。

理由書

右の者は

昭和四十四年十一月五日の大菩薩峠事件に加わり、同日現行犯として逮捕されたがその後の調査により次の事実もまた判明した。

同年九月二十二日、同二十三日の大阪曽根崎警察署管内派出所火炎びん放火事件の首謀者であったこと。

同年九月三十日東京大崎警察署五反田派出所襲撃事件の一員であったこと。

右により同年十一月二十六日、十二月三日、および十二月十二日、同人は殺人予備、放火未遂、凶器準備集合、爆発物取締罰則違反、強盗予備等の罪状により起訴された。

同人のこのような行動は、理由の如何を問わず、許さるべきことではなく、本学においては、かねてよりきびしく排除してきたところであって、入学当時の宣誓に違反することもまた明らかである。

本学としては、本件の重大性に鑑み、関係者を派遣して事実の確認を行い、慎重審議のうえ右の処分を決定した。

なおこの決定にいたる過程において保証人を通じ本人の反省を求めるとともに、その将来を考え、意を尽して自主退学を勧奨したがこれに応じなかったので、ここに退学処分に付するの止むなきにいたったものである。

よく聞うがゆえに、次々に加えられる権力の弾圧と、それに引き続く大学当局の弾圧に抗するため、産大独自の救援対策連絡会議の設立が呼びかけられた。

産大救対設置のよびかけ

昨年来、全国各地の大学で燃えあがった全国学園闘争の火花も今や休止の期間に入り、70年闘争の幕開きに備えている。我々産大においても全国学園闘争の戦列の中に多くの学友を送り込み、大きな役割を果してきたといっても過言にはなるまい。しかしこれらの中において、悔しくも権力側の絶大なる物理的力を前にしたとき、多くの戦う学友の間において単なる「戦う意欲」や「理論武装」のみでは、到底戦い続けることのできない何物かが自覚させられたに違いない。即ち、それは精神と物質両面における救援対策業務の欠除からであろう。そこで、もしこれをおろそかにすることによって、我々の闘争がこれから先大きな転換をせまられることになるとしたら、戦いの展望も先細りにならざるを得ないであろう。昨年1・17の東大闘争の中においても産大の学友が権力側によって不当にも弾圧、拘束されたにもかかわらず救対活動は行なわれなかった。又、10・21の場合も救対業務について認識している人がなく一部の者がドロ縄式に活動した等数え上げるだけでも今まで多くの問題点を残してきている。そこで今回これらの反省から京都市内においても戦う部分として大きなパートを占める産大に救対支部を設置することを学友にアピールしたい。そこで、我々救対設置を呼びかける立場から、学内において戦う部分として存在する、各セクト・ノンセクトを向わず多くの有志に集合してもらいたい。

日時　2月17日　6時　PM

場所　同志社大学学生会館ロビー

目的　救対設置に関する協議のため

産大民主化に全産大生は総決起せよ!

京産大の全学友諸君!　新入生諸君!　67年10・8羽田闘争に始まり、69年1・18・19の安田砦攻防戦を頂点とした全国学園闘争の切り拓いた地平とは何であったか。11月の佐藤・ニクソンの日米共同声明に顕著に見られる如く、日本帝国主義は70年安保のなしくずし的改編強化→日帝米帝による アジア侵略体制の強化、及び72年のギマン的反人民的、沖縄「返還」をその直接の突破口として再びアジア侵略を自からの延命のため開始しよう

としている。国内においては、大衆収奪の一層の強化、管理体制の完成化、治安体制の弾圧の強化自衛隊の帝国主義軍隊化を行なわんとしている。これらは、我々に一体何を示しているのか。それは米帝のベトナムでの敗退、インドシナ半島全体にわたる内乱的危機、そしてドル危機などに見られる世界資本主義体制の根底的動揺が、日帝の内部においても現出してきたことである。このような日帝の狂犬的な振舞いは、彼等ブルジョアジーにとって、残された唯一の延命策なのである。そして、その蓄積された諸矛盾を積極的に統一せんとする――それは畢竟日帝打倒へとつながる――革命的主潮に対しては徹底的な弾圧でもって、それを処するのだ。このような時に日帝の押し出す教育体系への政策はどうか。教育体制は言うまでもなく、その国家の安定度を決定づける一つの重要な中心軸である。だからこそ日帝は、初等教育に於てはハレン十極まる神話反動教育を復活せしめ、中等・高校においては、その教育の疎外が露呈され、大学においては大学立法等によって、学園のファッショ的文部管理化、全国の学園のアウシュビッツ化がちゃくちゃくと為されている。このような下での「大学」とは何か？　それは言をまたず、ブルジョアジーのブルジョアジーのためのブルジョアによるブルジョアの「大学」である。そこに於いて、学生とは物言わぬ羊として完成されるべく扱われるための商品である。体制を支える「優秀」な人材を養成するための「工場」として「大学」は在るのだ。それでは我が産大＝惨大では、ブルジョアジー国家権力による学園管理体系はいかなる形でもって貫かれているか。産大に於いては、この体系は最も着実に実践されていると言えよう。今我々は「志学会」なるものが全くのペテンであり、大学当局　荒木・小野体制のカイライであり、又当然それが真の意味での「学生のもの」ではないということを明白な事実として再び諸君に突きつける。産大ではこの荒木・小野体制の下、帝国主義者の論理が隅から隅まで貫徹されており、ハキ気をもよおすような反動「教育」がなされ、このファッショ体制の中から叛逆の叫びをあげ、真の人間性を奪還せんとする先進的学友に対しては学内機動隊をして白色テロを行なうという徹底した弾圧体制が敷かれている。諸君！　去る4月16日午後4時頃、1名の先進的学友が4人のヤクザ風の男達にグランド近くで襲われたのだ！　これは明らかに大学当局の我々に対する弾

圧である。学友諸君、右翼ヤクザ学生の暴虐を断じて許すな、右翼暴力学生は放逐せよ！　学友諸君決起せよ！

産大ローザ軍団

4・28沖縄闘争に全産大の爆発的高揚を！

70年安保粉砕、70年代階級闘争をにない、労働者農民市民学生との連帯を求めつつ、戦っている全産大の先進的学友諸君！

昨秋11月、人民の総反撃のうちに「成立」した日米共同声明は、米帝国主義の力サの下で、アジアへの経済進出をしてきた日本帝国主義が、公然と政治的軍事的侵略を宣言したものである。「72年返還」は米帝の極東最大の基地たる沖縄を日帝の中に組みこむことによって、米帝のアジア侵略体制に入りこみ、その中心にいすわるものである。したがってその「返還」は沖縄県民が真の「復帰」にかけたものとは全く無縁であり、ギマン的であり、より一層の基地強化を米帝に約束することである。日帝に対するわれわれの峻烈な非妥協的闘いは沖縄の一点をめぐって先鋭化し、日帝を窮地に追いつめ、国際階級闘争に、より高い闘争の質をもたらすだろう。そして4・28沖縄闘争は本土の人民、沖縄県民の、米軍政打倒、日帝打倒へのひるみなき闘いとして、組織化をはかり、断固実力闘争として闘わねばならない。

学友諸君！　我々は現在荒木・小野反動体制とその志向する産軍学協同路線の中にあって、そのセン滅をめざしつつも、右翼、大学当局の弾圧にあい低迷を続けている。しかし学友諸君、逆バリケード、検閲制度等々の大学当局の弾圧をのりこえ右翼を学園から放逐し、学園を自らの手に奪取し歴史的社会的実践の総括としての学問の確立を、われわれ自身の日常性からの脱却を通して実践すべく全国の戦う学友と連帯し、4・28沖縄闘争の最先端で闘い抜こうではないか。学友諸君！　結集せよ！

全産大沖縄闘争勝利総決起集会

←――PM2時30分　於同志社大学学館中庭

4・28労学市民京都集会に参加

PM6時　於市役所前

京都産業大学　4・28闘争実行委員会

沖縄斗争勝利！　安保粉砕！　日帝打倒！

産大斗争勝利！　荒木・小野体制打倒！

69年10・11月闘争を、全力量を投入しながら権力の強大な弾圧によって、一定程度の後退を示さざるを得なかった諸セクト・組織は、しかし70年安保粉砕を目指し、4・28沖縄闘争を突破口として決起した。72年沖縄返還が、極東における日帝の、米帝からの肩代りの証左にすぎないことを暴露しつつ、6月の安保闘争を射程に入れて、それは闘い抜かれていった。この間ロンノルによるカンボジア軍事クーデターと、それと一体になった米＝南ベトナム軍のカンボジア大侵攻によって、ベトナム解放闘争は、カンボジア・ラオスを含むインドシナ半島全域に及ぶものとなっていった。米帝の東南アジア全面侵略を糾弾する闘いは、権力による数人の射殺者を出しながらも、熾烈に闘ったアメリカの反戦派労・学友と連帯しつつ、いち早く経済＝軍事援助を決定した佐藤政府を弾劾し、日帝のアジア再侵略を阻止するものとして展開された。

産大の闘う学友は、学内への情宣によって本質を暴露しつつ、街頭闘争に取り組み、6月安保闘争の爆発的高揚を創出すべく、地道な活動を進めていた。一方志学会暴力崩壊事件以後、居坐り続ける無能な馬場執行部を指弾しつつ、学生の自主的な行動の一切を束縛する検閲制に対する撤廃要求が文連を中心にして起りそれを単なる改良闘争に留めることなく、当局の反動体制そのものに迫ろうとする種々の行動が開始されていった。

産大管理弾圧体制粉砕！

全学友は決起せよ！

――素朴な怒りを爆発させよ――

全学友諸君！　産大管理弾圧体制の一角に火の手が上がり、今まさにその全貌が暴露されようとしている。顧問制度とは、相談役とか教育のためとかいった体裁としてあるのではなく、我々に対する管理＝弾圧としてのみ存在する。大学当局は一方では部・同好会の強制解散を行なう意志があることを明言しながら、他方では全学友に向って今なお無対応の沈黙を守りつづけている。これこそがまさしく大学当局のハレンチなヤリ口であり、管理弾圧体制が暴露されることを恐れ、問題点をはぐらかし、なしくずし的に圧殺しようとする陰謀なのだ。学友諸君！　顧問制＝検閲制＝政治活動禁止＝教養ゼミ＝アッセンブリアワーがみごとに連関をもった管理弾圧体系であることを知っているか。当局は、我々の学内外での行動の一切を監視弾圧し、教養ゼミで思想調査を行ない、アッセンブリアワーで対話のポーズをとり、学友の不満をそらしている。当局はこれほどまで策謀を用い我々を監視しなければならないほど、自らの教育や理念に対し自己不信に陥っている。まさに「就職のため」という一言をのどいて、産大の受動的教育にいかなる価値があるのか。当局は、我々が従順に就職する＝無批判に中堅学働力商品となることに、疑問と批判をもつことを予測していた。だからこそ、管理弾圧体制を必然的に設け、恐かつと懐柔を行なわねばならなかった　だ。

これでいいのか学友諸君？　今こそ奴隷根性から脱出し、自由を奪還し勝ち取り、眠れる自己の主体性に目ざめよ！！

反動弾圧学則粉砕！

産学軍学協同体制粉砕！

小野・堀江・荒木体制打倒！

産大職訓株式会社解体！

追分感化院解放！

産大ラジカル行動委員会

全産大生は"6月斗争実行委員会"結成大会に総結集せよ

全ての京産大の学友諸君！

6月安保改定期を直前にして、日本階級闘争の爆発的局場は全国津々浦々の学園・職場に於いてまき起りつつある。にもかかわらず我々反戦連合の原点である産大に於いては、荒木・小野右翼反動体制が志向する産軍学協同路線をせん滅せんとして闘ってきた先進的学友諸君、そして我が反戦連合は、共に権力・大学当局、右翼の暴力的弾圧の渦中にあって低迷を続け、屈辱にせんじてきた。そして今、我々が過去の闘争において繰り返してきた自らの混迷を自己批判的に総括するとともに、我々自身の情況を獲得すべく、右翼反動体制粉砕に向って再度決起することを決定した。現在、インドシナ人民の英雄的な反帝・民族解放闘争の中で、ひたすら帝国主義利害を追求する米帝のインドシナ侵略戦争は決定的な敗北過程を経過する中において、戦後世界体制を根底的動揺・崩壊過程に、とりわけ帝国主義世界に於ける米帝国主義総体の危機的深化を顕在化させていったものに他ならない。七十年代国際階級闘争の展開は、まさに

インドシナ人民の闘いに代表される第3世界の民族解放闘争と資本主義国内における反帝闘争を基軸として実現されているのだ。すなわち、67年10・8日の第一次羽田闘争以来、反戦派労働者、学生、市民の圧倒的な闘いは、虚妄の戦後平和、民主主義を根底的にバクロし、階級闘争の新たな局面を構築し、また新たな階級情勢を切り開いたことに現れている。そして、このことを端的に言うならば、戦後世界帝国主義体制の内的危機、すぐれて世界戦略的展望たる反帝闘争の全人民的な激化という形で噴出してきているのだ。昨秋11月、自らの延命をはからんが為に米帝と一層癒着し、公然とアジア侵略を宣言した日帝は沖縄を再びアジア侵略の最前線基地、太平洋の要石として機能を損うことなく永久核戦略基地の最大の効果をあげるべく、帝国主義的な野望のもとに沖縄基地の強化を策した反人民的な、72年返還を決定したのだ。これらの一連の反革命的策謀に対して我々は沖縄闘争勝利の圧倒的爆発によって粉砕していかねばならない。六月安保闘争はこのようにして規定され、その勝利に向って進撃せねばならない。そして、かかる局面において我々があの日共＝民青に代表される反革命勢力を容認するならば、それは即ち産大の闘う部隊を敗北に導くだろう。スローガン的団結、スケジュール的戦術に固執するならば、我々は闘わずして予防反革命勢力の前に屈服を強いられるであろう。我々は日共＝民青を徹底的にセン滅する一方、闘いの中から生み出すジンテーゼとして打ち出さねばならない。そして今、まさに烽火の上がらんとしている産大闘争の組織保証として大衆運動の戦闘的、原則的組織化として「京都産業大学6月闘争実行委員会」の結成を6月闘争を突破口とする、産大の革命と激動の70年代はかかるものとして闘われねばならない。今やまさしく新たな戦場は設定されている。全ての産大の闘う部隊、学友はこの局面を勝利的に闘わない限り、もはや階級闘争とは無縁の存在となるだろう。全産大の戦闘的学友の総結集をもって6月9日「六闘委結成大会」を成功させ、6月闘争の圧倒的勝利を確認しようではないか？

石翼反動体制粉砕

政治活動の自由を勝ちとろう

検閲制度撤廃　不当処分白紙撤回

資本の大学支配＝産軍学協同路線粉砕

米帝のアジア侵略徹底糾弾

沖縄闘争勝利

安保粉砕・日帝打倒

場所　同志社大学学館会議室
日時　6月9日（火）午後5時半
集合　同大学館中庭

京都産業大学
反戦連合

6.9アピール

京都産業大学
6月斗争実行委員会

全産大一万二千の学友諸君！

今やわれわれの斗いは、おおいなる岐路に、果てしなき試練の場に立とうとしている。君のもてる主力、全情熱、全神経を権力との斗いに集中せよ。

産大斗争は、われわれ産大生にとって完全に桎梏である荒木・小野体制（右翼反動体制）の根底的破壊と、そしてこの荒木・小野右翼反動体制にとって代り、われわれが、自身のアンチテエゼを打ち出していく斗争であり、まさにその意味において明らかに一つの大学革命である。だからわれわれは文字通りの大学私物化を通じて、一層反革命の拠点作りに拍車をかけている右翼反動体制（荒木・小野体制）の打倒を戦術スローガンとして掲げ、その根底的変革＝産大斗争勝利をめざして突き進まねばならない。今日の帝国主義体制それ自体の危機的状況の下、革命と反革命の嵐が吹きすさぶ中にあって、われわれは大学斗争をもっと戦略的に透視して、理論構築を行なうとともに、産大斗争においては、その意味で大学革命の前衛たる展望を与えなければならない。そして、われわれの進撃をはばむ一切の反革命勢力の糾合たる「右翼組織部隊」こそは、武装反革命による右からの強権的突破であり、支配者論体が産大に帝国主義教育支配を物質化するという政治的意図を貫徹するための、いわば戦術配備の一つである。われわれは斗う部隊に消耗と破壊を工作する右翼暴力団を大衆の面前で徹底的に粉砕する一方、かかる斗いの中から生み出すジン・テエゼを断乎として打ち出さねばならない。われわれが獲得すべき情況とは、かかる政治とかかる戦争にほかならない。われわれが闘争するのは連続的、永続的、さらに日常不断の斗いでなければならない。まさに産大における国際階級斗争の展開は、英雄的インドシナ人民の蜂起を頂点とする第三世界の反帝・民族解放斗争を主軸として実現されている。十・八

羽田斗争以来、革命的左翼に代表される、労働者農民・学生・市民が一体となって全国的にまき起した斗いが、日本国内にとどまらず、全世界的に虚妄の「戦後平和と民主主義」を根底的にゆさぶり、階級斗争の新たな局面を構築し、また新たな階級情勢を切り拓いた。すなわち、それは、戦後世界帝国主義体制の内的危機を、すぐれて世界戦略的展望たる反帝斗争の全人民的な激化という形でつき出しているということであろう。そして日帝は、日米安保同盟のアジア総体への発動たる日米共同声明によって、沖縄の反人民的な「七十二年返還」を、帝国主義的利害のもとにとりきめたのだ。この反革命策謀を、われわれは沖縄斗争の正面的爆発でもって粉砕していかねばならない。六月安保斗争はかかる斗いとして規定され、その勝利に向って進撃していかなければならない。われわれは再度、逆バリ、先進的学友へのテロ・リンチ等々の大学当局、右翼暴力団の弾圧をのりこえ、学園を奪取し、歴史的・社会的実践の総括としての学内の確立を、われわれ自身の日常性からの脱却を通して実現し、全国の戦う学友と連帯して、全国学園斗争の最先端に立って斗うことを決意した。そして産大斗争の勝利を勝ち獲るために

今われわれに必要とするのは、権力構造の明確な分析であり、まさに蜂起せんとする我々の斗いの中で提起されるであろう新しい政治であり、新しい質の戦争の永続化である。

学友諸君！

クラス・ゼミの授業放棄を勝ちとり、六月斗争を突破口とする産大斗争の圧倒的勝利に向って総決起せよ！産大斗争を不返転の決意でもって斗わんとしている学友諸君！　全産大の学友諸君！　ひるむことなく永続的な斗いへと進撃しよう。そして右翼反動体制せん滅に向って、戦斗的団結を勝ちとろうではないか！

一九七〇年六月九日

六月斗争実行委員会結成大会

72年沖縄返還や、万国博開催などによって国民の関心をそらしつつ、自動延長によって「日米安保条約」を再編強化しようとする策動に対し、6月安保粉砕斗争は、断乎として貫徹された。自衛隊の治安訓練を数倍強化する程に、斗いの高揚を恐怖した支配者層は、最大限の権力＝機動隊＋私服の動員によって一切の斗いを圧殺せんとしてきた。一方においては「安保ぜネスト」を形式だけの時限ストや転場集会等にダウンさせ

斗争放棄を決め込みながら、反トロキャンペーンを繰り広げる共産党や社会党、総評等の既成左翼を激しく糾弾しつつ、真に闘うものが、反代々木各派、反戦青年委、各大学全共闘、ベ平連、市民組織等に結集する戦闘的部分であることを明らかにした。

日増しに激化する闘争をヨソに微温湯的な学園風景を続ける産大においても、全ての闘う学友の結集によって〝六月斗争実行委〟が結成され、精力的な活動が展開された。反安保斗争が、単に政治斗争としてではなく、安保体制下の反動性の突出した形で現在の産大がある以上、我々の産大斗争は密接な形で政治斗争をも担わねばならぬとの主張の下、全産大一万二千の学友に総決起が訴えられていった。

万を越す情宣ビラや抜き打ち的なクラス討論等によって多数の学友の斗いへの決意を確固としたものにしつつ、その集約としての街頭斗争を推進していった。その街頭斗争は、あらかじめ設定されたスケジュールに合わせるだけでなく、我々のヘゲモニーによる産大独自デモを設定し貫徹した斗いを始めとして、他大学との連帯集会、街頭斗争をも追求、実現していく中で二週間余の連日に渡って断乎克ち取られていった。

京都産業大学反戦・反安保斗争宣言

六月安保粉砕斗争を断乎貫徹！

――首都の闘いと連帯し、京都全域で激烈な闘いを――

京都の全ての市民・労働者・学生諸君！

十年前、あの国会前において無残にも虐殺された樺美智子さんの死を忘れることなく、その後の山崎君・糟谷君・中村君等の虐殺を無念の涙と共に受け止めた我々は、その涙を権力への怒りへと変え、今その十年間の怒念を正しく70年安保粉砕斗争として爆発的に克ち取っていく決意を固めている。もとより安保粉砕斗争は、すぐれて政治的な闘いであり、昨秋の日米共同声明に基づく日帝の更なる反動化を一挙的に粉砕していくものとしてあるのだ。

沖縄人民の主体性を全く無視した「72年返還」を欺瞞のうちに取り決め、その沖縄米軍基地からB52のベトナム・カンボジア爆撃を許容し、自らは反共参戦国会議とも言うべき「アジア会議」の主導者となって、インドシナ人民の斗いを圧殺する立場に立ったアジアの盟主としての地位を固めつつあるのが、反動極まる佐藤政府に他ならない

のである。

あの日大・東大・京大を頂点とした全国学園斗争は学問・大学・社会総体の諸矛盾を鋭く問いつめつつ、自らの大学を構築していくという新しい負の闘いであり、今日の大学が資本と全く密着しているからこそ、それは権力との真正面からの対決として結果したのであった。大学立法の施行や機動隊の無差別導入、反革命日共＝民青の通敵行為等によって、弾圧に正殺されたかに見えた各学園の闘いは、今また安保粉砕学園長期ストとして不死鳥のごとく蘇りつつある。

しかしながらこの間、京都産業大学においては政治活動の禁止、検閲制、顧問制、処分制等々を柱とした反動的学則と、建学理念の下、闘う学友に対するあらゆる締めつけを加えてきた。それは中教審答申を先取りした管理運営体制として、二人副学長制や教養セミ（期待される人間像作り）を設定し、日大をも凌ぐ緻密な管理弾圧体制を確立し、東大斗争参加者や、街頭斗争における不当逮捕者等に対する退学・期限無し停学という処分攻勢をかけて来ているのである。そしてその暴挙を糾弾しようとする先進的学友に対しては、子飼いの暴力団とも言うべき右翼学生と職員を使って肉体的に敵対してきており、我々の力量不足のゆえもあって、この屈辱を甘んじていたのが今迄の我々であったと痛みを込めて言わなければならない。

京都産業大学は独占資本とのまったき癒着によって成り立ち、文字通り産学協同路線を邁進すると共に、今や軍学協同路線をも追求している。

我々はこのような搾取する側に奉仕する大学、支配者に尽す大学というものに、はっきりとANTIを突きつけ、その根本的崩壊を目指して闘っていかねばならない。日本支配者層が、安保改訂によって、日米両帝国主義のより緊密な結びつきを策しており、その教育政策にのっとった形で現在の産大がある以上、我々は70年安保粉砕斗争を明確に産大斗争と関連した形で位置づけ、闘っていかねばならない。

これまでの闘いを批判的に総括した我々は、大学当局の処分策動や右翼暴力団の敵対を粉砕し、授業放棄をテコとした全学ストを提起し、京都の地に於いて、首都と固く連帯し、最先端に於いて闘っていくことを宣言する。

70年安保粉砕！
米帝のアジア侵略糾弾！

沖縄斗争勝利！
産大右翼反動体制粉砕！
産大生は斗うぞ！

産大六月斗争実行委員会

全学スト（実質的授業放棄）を勝ち取れ！

安保粉砕に向って隊列を固めよ！

全ての先進的学友諸君、とりわけ安保粉砕に立ち上っている学友諸君、そして産大の現状に甘んじられない学友諸君、日本の現状に我慢出来ない学友諸君、我々六月斗争委員会並びに反戦反安保行動委員会より戦況を報告したい。

我々は6月13日、同志社大学より全京都の先進的労働者・学生の集会・デモに合体して圧倒的な勝利のうちに我々の行動を貫徹した事を報告する。更に6月14日には同志社大学館より立命大・同志社大の支援を得ながらも産大の全ての先進的学友を結集して産大独自デモを圧倒的に勝ち取った。そして同じく15日にも同志社大学学館より　立命大・仏教大・府立大・同志社大・立命大の支援を得、14日をも圧倒する中で産大の反動性を許さながら、安保粉砕！　インドシナ侵略戦争糾弾の産大独自デモを勝ち取った。

我々はこうした苦しいが、しかし確固とした闘いを組んでいる。産大独自デモにも各大学よりの熱い連帯の支援が行なわれたという事を報告するし、又学友諸君にも充分に認識してもらいたい。14日より市役所前から円山公園までのデモは連日行なわれるし、首都結集する学友も多大に上る事は明らかであるが、この連日デモは23日までに日増しに多く、大きく、烈しくなるであろう。

我々六斗委・反戦反安保行動委員会は断固としてこの斗争を貫き、安保粉砕！　インドシナ侵略戦争糾弾！　の闘いを勝ち取ることを宣言する。

70年安保及びそれを支えるところの日米共同声明・出入国管理法案・自衛隊そのものは黙って見ているだけでは消滅、粉砕されないし、産大の現体制、特に右翼の動員は粉砕されることは決してない。我々はこうした背後から安保をささえる諸制度・法案を糾弾、粉砕する中で、また安保そのものに対する斗争を貫徹することによって日本帝国主義アメリカ帝国主義をも粉砕しなければならない。こうした確固たる闘いこそが我々の時代を作り出す着実な第一歩であり、一歩一歩であることを認識すべきである。学友諸君、我々は再三の

ビラによって告発して、来にがアメリカ帝国主義は必死で狂気の如きインドシナ侵略を拡大・強化しつつある。日本帝国主義は台湾では実質的にアメリカ帝国主義に換って侵略を拡大しつつある。このことは香港の周力波の発言によって明らかである。日本帝国主義者はこうした海外の援助者たるべき方面からさえも批難されながらも昔日の大東亜共栄圏を夢見つつ貪欲なまでのエコノミックアニマル故の狂暴性と帝国主義食略を用加強化しているのである。

学友諸君再度訴えよう！

15日以後23日までのデモ貫徹を18時より、市役所前――円山公園というコースで行なう。

全ての先進的学友は産大の旗の下に結集し、そして圧倒的なデモンストレーションを勝ち取り、帝国主義者、一部独占資本家階級・反動的階級支配者にとって恐怖の、固い鉄のクサビを打ち込まねばならない。

京都産業大学　六月斗争委員会
反戦反安保行動委員会

70年安保粉砕

6・19北部大学共闘総決起集会に結集せよ！

――産大・府立大・大谷大・仏教大・工繊大――全ての産大の学友諸君！

日米両帝国主義のより緊密な関係強化と、何よりも日帝の再度のアジア侵略を方向づける70年安保改訂に対しての我々の闘いは、現在激しく闘われている。それは、数万の市民・労働者・学生の決起によって圧倒的に克ち取られた首都東京の闘いに固く連帯して、京都の地においても確固として闘い抜かれており、産大の先進的学友が常にその最先端に位置していることをまずもって報告しなければならない。

6・12関西総決起行動御堂筋斗争に数十名で決起した我々は、その晩に十数名の上京部隊を送り出しながらも、6・13全京都学生ベ平連総決起行動を闘い、6・14には同大学館中庭において〝産大総決起集会〟を多数の学友の結集によって克ち取り、市役所前までのデモンストレーションを、豪雨にもかかわらず産大独自の隊列でもって圧倒的に貫徹した。続いて6・15には全学ストを決起

しつつその集約として同大学館中庭において再度の〝安保粉砕産大総決起集会〟を大谷大・仏教大府立大等の学友を迎える中において打ち抜き、戦闘的な市内デモを終始その最先頭に立ち、権力の暴力団＝機動隊・私服らの暴行をハネ除けつつ断固として闘い取った。あの十年前、国会南通用門前で虐殺された樺美智子さんの死を悼み弔旗を掲げて6・15を闘った我々は、今その怒りを更なる斗争への決意へと変え、6・22 23の爆発的高揚を創出すべく連続的な闘いを展開しているのだ。

産大が独占資本と反動政治勢力、権力、自衛隊等と密接な関係にあることは、もはや周知の事実であり、その産大の反動性を守り抜かんがために学生の主体性を全く骨抜きにする学則を押しつけ、公然と右翼暴力団を徘徊させているのである。そしてこのような後進性が、日大をも凌ぐような管理弾圧体制と中教審答申を先取りした形での教務運営体制によって、全国の学園の明日の姿とでも言うような〝体制の御用大学〟として立ち現われているのだ。それゆえ産大の反動体制、とりわけ産学協同路線・軍学協同路線に対決する我々の闘いは、全国諸大学の闘いの質をいち早く明示するものでなければならない。教育の帝国主義的再編成にのっとり、独占資本との共存共栄の道を一路邁進する産大に対する我々の闘いは、単なる改良斗争の質では、まったくその根本に迫ることも出来ないことを知らなければならない。産大・日大を筆頭とする、全国学園の反動激化は、何よりも日帝の政治方針の貫きに裏打ちされており、だからこそ、我々は政治斗争をも全力量で担っていかなければならないのだ。その一大結節点こそが、70年安保粉砕を目指す六月斗争であり、産大という最も反動反革命の砦に居る我々こそが、最先端で闘っていかなければならないのだ。

産大の全ての学友諸君！　取消と怠惰の学園生活を拒否せよ。自らの生を取り戻すため、安保粉砕・産大反動体制粉砕の闘いに決起せよ!!

70年安保粉砕！
米帝のアジア侵略糾弾！
沖縄斗争勝利！
産大右翼反動体制粉砕！
6・22 23全学スト断固貫徹！

6・19北部大学共闘総決起集会
12時　京都府大正門
3時　大谷大中庭

産大六月斗争実行委員会

産大の戦闘的学友は、困難な状況の只中にあって、一歩も退くことなく連日の〝安保粉砕闘争〟の戦列の最先端に位置し続けた。この間、我々の行動に動揺した右翼教名が、折から連帯集会を開いていた仏教大学構内に木刀を持って殴り込んで来たり、街頭闘争参加者監視のために学生課職員が総動員される等の、大学当局＝右翼陣営の緊張や、我々の集会やデモの隊列の中に日毎に新しい学友を迎え入れるような情勢が生み出された。がしかし、致命的であったことは、今回の闘争においても、学内での直接的な大衆行動が一つとして実現出来ず、遂に流動状態を創出することが出来なかったことである。北部大学共闘による府立大・仏教大・大谷大等との高度な連帯の達成や・6・23円山集会への二百名にのぼる学友の結集等の八成果にも関わらず、我々が真に〝安保粉砕斗争〟を全学的な課題とし〝産大闘争〟そのものとして闘い抜いていくためには、何よりも学内における大衆闘争を展開しなければならず、その地平を獲得出来ない限り、どのような成果も、八〆付にしかすぎないという自明なことを、再度思い知らされたのであった。

65年の日韓条約阻止闘争の最中に建学が決められた筈六は、再度のアジア侵略を目論む程に政治・経済面の再編成を終えた日帝の教育再編成の先峰としていわば六十二、三年に立法出来なかった〝大管法〟の精神に忠実な大学として出生したと言える。それからの五年間、その全てを体制護持に捧げんとする大学当局に対し、その企みを見破った多くの学友によって種種の闘いが組まれていった。それらの多くが、強大なる大学当局＝右翼の弾圧と、我々の戦列の脆弱さに規定されて、ほとんどが敗北の途を辿ったとは言え、我々は敗れ去った訳では決してない。産大がある限り、我々の闘いは無限に続くであろうし、学友諸君が居る限り勝利することは確実なのだ。

69年10・11月から70年6月にかけて熾烈に闘われた〝70年安保粉砕闘争〟が、60年安保以降十年間の全てを、良いにしろ悪いにしろ集約し、今我々に更に高度な戦線の構築を迫っているように、産大闘争もまた、その質をどのように飛躍させることが出来るのかと鋭く問われているのである。そしてこの問に唯一答えることが出来るのは、日々の厳しく苦しい闘争を確固と担っている戦闘的学友諸君の他には無い。我々の闘いは、まさに今その端緒に着いたところであり、産大闘争に勝利するその日まで、一歩もひるむことなく前進するだろう。

発言篇

敗者の展望

元外二　H・F

疲れ切った確信
語るべき言葉をも見い出さず
「十一月決戦」は去り
ナポレオンが北叟笑むように
「六月安保決戦」が
場末のキャバレーの四方八方で糜爛する

好きなように言えばいいさ
思い出に浸ればいい
フランス革命の勇士は今甦る

フランス革命は凄かったろう
君は闘ったんだろうなあ
勇ましく　敵を恐れずに

そうだ！
君は闘ったからこそ　闘ったからこそ今生きていけるんだよ！

でも一体
フランス「十一月」革命は　何だったんだ？

でも君は闘ったよ
勇ましく　敵を恐れず
だからこそ　今　生きる権利を獲得したんだ
何もせずに生きる権利を！
行動しなくてもよい権利を！

勲章もらって　歌うたい
三流バーで　ハイニッカ飲みながら
勲章もらって　歌うたう
遠い遠い昔の歌を
インターだ！　ワルシャワだ！

ぼくは敗残兵
昔話も　思い出もない

でも
でもぼくは自負して言う
ぼくは　君達の持つ立派な勲章は
踵かけて　足で踏んづけて
毛の抜けた病気の犬に
とっくの昔にやっちまったと
その病気の犬は言ったよ
「やっとこれで救われる」と
犬め！

「激動の十・十一月闘争」を胸の奥深くにしまい込んだ諸君へ贈る。

まず立ち上がれ！

外三 S・M

京都産業大学。それは中教審の先取り大学として、神山のふもとに日ノ丸をたなびかせながらトリデのごとくそそりたっている。そしてその中にいる我々は人間としての基本的条件をも踏みにじられて、ただ現在の社会機構の中にうずくまり、黙黙と一部資本家のための一歯車となり文句もいうことなしに、人間というものを押し殺した労働を喜ぶ人間に変えられようとしている。そこには発言権もなければ、選択の自由すらないのである。ある者が、又あるサークルが自己の主張を、大学当局の不当性を述べようとしたなら、朝から学生課の職員が何十人とうろつき回り、いざアジりはじめると右翼暴力学生のはげしいヤジとともに彼等にかこまれ、ごつきまわされ、職員に連れ去られてしまい、そこには何の叫びもなくなってしまうのである。そのような現状を目の前に見ながら我々は何を考え、何を行動に移しているのであろうか。

そこにはただ遠まきに、そのありさまをながめている集団があるだけではないだろうか。意見のくい違い、またセクト間の関係等いろいろなものが関連してその人の行動をおさえているかもしれない。しかし多くの学生が不信には思いながらも、かかわりたくない、彼等になぐられるのはいやだ、別に俺がやらなくてもと考えているのではないだろうか。たしかに一部アジる事だって、その人にはすごく勇気のいることにちがいない。しかし、そのんにも、又私にも出きることなのだ。またしなければならないことなのである。それば かりではない。隣の人に語りかける事も、便所での落書きも、ビラをばらまく事も、アジる事も我々一人一人は今本当に行動をおこしているだろうか。またしなければならない事に対して目をつぶっているのではないだろうか。自らに問うとともに、諸君にも問ってみたい。

現在にいたっては、もはやこれらの段階を乗り越えて新しい段階に入らねばならぬ時期である。しかしそ

れが行なわれていないという事はすべての者が自己批判しなければならないであろう。

またこれらの行動は単に産大内部におけるものだけではなく、常に現在の日本の状況、世界の状況と相対して行なわなければならない事は当然のことである。確かにそれらは厚い壁となって我々の目の前に立ちふさがり、すさまじい弾圧によって我々を死滅させようと迫ってくるであろう。しかし、我々は何度も何度も立ち上がり、人間として真の解答が得られるまで戦い続けねばならない。

まず立ちあがり、行動しようではないか！

五・一二三の臆病者

元法三　M・T

大きくジグザクで東上、そして転換フランスデモ、最後列で友とがっちり手を握る。シュプレヒコール、インター。生きているまさにその実感が全身を包む。体が震える。同時にそれまでの野次馬的、無責任な斗争参加が痛烈に自分を苛しめる。打ち消すように一層大きな声でシュプレヒコール。完全に陶酔状態。

突然吉田寮から乱斗服の機動隊が大きく前に立ちはだかる。それに続いて後方から機動隊、羊をおそう狼のように、よだれを垂らしながら駆けている。学友の多くは近衛通へ逃げる。医学部の高い塀を越える者もある。暴行を受け逮捕されはじめている。私はしばらくフランスデモの最後の地点で呆然と立ちすくんでいる。隊員が近づいてくる。歩道へ走っていく。さらに多くの友がシェラルミンの盾をリンチ。ひどい！いきなり一団の機動隊員が腹を蹴り上げ、両手をがっちり掴み私を他の隊員に渡す。無言の手手両手の不自由さと腹をかばいながら運れられていく。やりに空がきれいだ。両側の歩道には市民の野次馬が激しくバ声をあびせて来る。小石が目の前を飛んでいく。彼等に怒りを感じたが、声に変えることはできなかった。不思議に二度目のせいか心に余裕があった。疲れがドッとでる。

川端署に着く、ここも二度目。もう多くの反が权力の虜となっていた。私を連行した隊員と一緒に坐って順番を待つ。同じくらいの年だ。無能にされた彼がかわいそうだ。近くで反が個人テロを受けている。顔が血だらけだ。勇気が臆病に変わっている。簡単な取り調べ、氏名、住所黙秘。服装、適当に書いている。

格子の入ったバスで各署に送ってくれる。四十人くらい乗っているようだ。中には重苦しい空気が淀んでいる。近くの隊員と話していて小指を傷つけられる。頭がボンヤリしている。今度は窓の外を見る。五十分くらいして守治署に最後に着く。反五人が残っていた。これからの住いである留置場でひと休み。さあ、これからが長い沈黙の時間だ。

結局この守治署には十五日いることになる。その間に反四人が直接の面いから放される。最後の一人も。だけど私は残ってしまった。取調べの係長、次々と変わる検事、陰険に強引に、そしてネコなで声で（これには一番弱い）襲ってくる。斗争への理論把握、意思確認もしていない私にとって、彼等国家权力の先兵とは、欺瞞的な感情の対立はあっても思想的、階級的対決はほとんど見い出すことは出きず、私個人に対する弾圧の不当性を、まさに組織、斗争全体に対する破壊、弾圧と位置づけることが出来なかった。そして当然の敗北。更に執拗なる弾圧＝起訴。自己をどこかに落してしまっている。過去への悔みが頭をもたげる。法への反逆児（同居人）にも冷たくあたる。事物、人が空虚となって目に映る。頭がさらに狂って来る。

ここは京都拘置所。高い塀に覆れた灰色の建物。国地サイズの独房から、庭にスズメがじゃれているのが見える。まことに健康的な生活だ。ただ麦飯は慣れないので苦労する。水ばかり飲む。腹だけ異常にふくれているみたいだ。看守に借りた本をがむしゃらに読む。活字が懐しい。まぶしいくらいだ。言葉も使ってないのに気づく。忘れてしまいそうだ。運動の時間だ。ブロックに囲まれた小さな場所。空気がおいしい。陽の光、拝みたくなるほどありがたい。同じ時刻の食事、起床、睡眠、運動点検、それらに象徴される日常性に埋没するのを怖れる。冷静になってくる。思考が戻ってくるみたいだ。否定が自己を多く占める。思想が蘇生してくる。人間として、労働者として生きることへの認識を深めて来ているようだ。

元気になって来る。そうだ歌を唱おう、インターを！

覚醒

外三　K・S

なぜ我々は立ち上がらなければならないのか。なぜ我々は斗争に取り組まなければならないのか。

「医者諸君、この病気の原因は栄養不良と新しい空気の欠乏とによる貧血病であることを一目見て知った諸君は、この病人に向って何と言うか。毎日うまいビフテキを食べろと言うか。郊外に出て少し運動をしろと言うか。もっと乾燥した、空気のいい室に移れと言うか。馬鹿な！それが出来るくらいなら、諸君の忠告を待たないで、もうとうの昔にやっているのだ」とクロポトキン（大杉栄訳）は語っている。この貧血の貧乏人は、夫婦共稼ぎをしても、毎日毎日汗を流して寸暇を惜んで働いても、一向に手に金の入らぬ労働者か農民である事は、たった数行の書き抜きからでも察視はつくであろう。世の中にはこのように日常生活にさえどうしようもない人々の一群と、毎日毎日ビフテキを食って、郊外に出て少し散歩をしている如き人々との一群がある。すなわちこれが二大階級というものであろう。

歴史的な日本大学の斗争に〝女子学生に訴える〟というビラが文理学部女性有志によって出されたが、この中には「しかし私達は自分を一個の人間として考えなくてはいけません。私達も男の人と同じように頭脳があるはずです。だから考えられるはずです。自分の確固とした意見、主張がもてるはずです。サークルで友人の間で、私達がちょっと矢張しても、まあいいやとか気にしないとか言って見のがしてくれます。しかし、この見のがすという事は、私達を人間として見ていない事であり、見のがされるという事は、自分自身を人間として見ていない事なのです。私達が真に大学生でありたいならば自分自身で考え、表明し、行動することです」と訴えられている。

二つの階級があるという現実と、私達は自分自身で考え、表明し、行動しなければならないという認識を見つめた時にこそ、否、認識するからこそ立ちあがらねばならないといえるだろう。

二つの階級に関しては先に上げたクロポトキンの言葉をもってすれば貧血で苦しんでいる如き労働者が大部分であり、毎日ビフテキを食える階級は極く少数だという事実からして翻って私達貧血で苦しむ労働者は、毎日ビフテキで腹を肥やしている極く少数のものに支配、利用されてはならないという点に於て大多数の指示を受けるであろう。故にこそ私達は立ち上がらねばならないのではないか。

一転して話が変わるようではあるが〝社会主義は恐いものなのか。社会主義国家では自由はないのか、という件に触れよう。

逆説的に述べることになるが、では現在資本主義国家に於ては本当の意味での自由はあるのかということを考えることにして、私達の産大というものを見る時、自由は否定されるのではないだろうか。例えば今文運が取り組んでいる顔問制度についても、事実上、顔問がいなければそのクラスが解体されるという実際面でのクラスの規制であることは衆知のことである。その他我々が当然知るべき経理上のことは一切公開されてはいないという現実、更に顔問がいるということなどや、集会に関しては場所、内容等の規制が行なわれて事実上の集会の自由はないこと、更に事件以后十六ヶ月の時間の経過があるにもかかわらず〝逆バリケード〟が撤去されていないことなどは、自由を著やかすものとしても見逃せられないものであろう。産大に限ってもこのように自由は大きく拘束されているし、社会では氷山の一角であるところの公明党の出版防害事件や大雑誌では天皇批判を認められていないという事実、各地の公安条例による集会・デモの規制、最近話題をよんだ映画の広島の原爆や博多での放送局における圧力など、自由は大きく限定されている。このようにみてみれば社会主義国は自由がない。社会主義国は恐いなどということは文字通り、ナンセンスということになるではないか。逆に社会主義国はオ一に労働者大衆のための国家機構をとっている点、オ二に将来への展望があるという点。オ三にオ二の展望が人民大衆のためのものであるという点にもとづいて、資本主義国家のようにオ一に利潤が資本家のためのものであるなど労働者への還元が非常に少ない。オ二に国家機構そのものが資本家に有利である点。オ三に将来へ今直ぐにも侵略戦争をする可能性があるということ。などと比較すると社会主義・社会主義国家がより優れていると思う。二つの階級がある限りにおいて、私達貧血で苦しまねばならない者は社会主義は私達の味方であっ

ても敵ではないということは明らかなのではないだろうか。産大においても私達の真の味方は学生大衆であって、決して学校当局ではないだろう。そのことに関しては六九年の一月二十七日の志学会への暴力集団の集団リンチ事件や、その後の推移やこの事件に関する学校当局の処理ぶりを見れば何より明らかであるといえよう。

再度原点に戻って、なぜ我々は立ち上がらなければならないのか。なぜ我々は斗争に取り組まなければならないのか考えよう。

下剋上や弱肉強食という言葉は誰でも知っているであろう。私達はこの言葉を聞くたびに何と恐れおののくことであろう。中学校の或いは高校の授業で私達はこの言葉に対してどれほどの恐怖と軽蔑をしなければならないかを教わったであろう。全くその通りではないか。そして何よりも怖しいのは現代は下剋上、弱肉強食の時代であるということだ。そしてそれより怖るべきは私達は食われ、殺される立場にあるということである。私達無産者はただ団結することにしか力はなく、資本家は充分に私達を食うだけの力量を持っているということではないのか。パチンコをして麻雀を打って、エロ話をして何もせずに、のほほんと政府が自分達に味方をしてくれるものだと思い込み、又学校とは俺達の味方だと思っているうちにも私達は、私達を食うべく資本家達のワナに落ち込んでいるのではないか。あるものは小学校から、またあるものは中学から、或こそはエリートなりとエレベータに乗った気分にさせられ、そして大会社へ入る事のみに心を奪われた私達であってみればどうなるのも無理からぬことであろう。しかし大会社入ったとて何ら私達は私達自身を自由にし、生活を楽しむことにはさせないのである。そうではないか。例え立派な家があって、可愛い女房がいてステレオがあって、車があって、カラーテレビがあっても、私達のためには単になぐさめるものにすぎないではないか。

やはり私達は私達の世界を作らなければならないではないか。私達自身の世界を作らないなら私達は永遠に食われる立場を子子孫孫に伝えなければならないことをはっきりと認識出来ているではないか。過去の長い歴史が示して私達庶民のものではなく、私腹を肥やした一部の支配階級のものであったことは今こそ私達無産者が庶民が立ち上がらなければならない事を如実に語っているではないか。

三度原点に戻ろう。なぜ我々は立ち上がらねばならないのか。なぜ我々は斗争に取り組まねばならないの

か。このことをとっくり考えよう。

諸君この続きは諸君が考えて書いて　欲しい。

思うこと

外三　R・M

僕はこの様な場所に文を載せるのはあまり好きでもないし、それに僕自身が果してこの様なタイトルを持つ本に載せる資格があるのか疑問なのですが僕なりの綿拓（この様な言葉が合ているのか疑問ですが）というか、今の僕自身の考えを正直に書いてみたいと思った訳なのです。どこかのセクトのアジテーターのカッコいい言葉など書ける　わけはもちろんありませんが……それに僕の文を読むと新入生の諸君達は戦列に加わらないのではないかと思い僕自身、戦斗的に权力と斗っている人達から裏切り者、日和見主义者などと言われるのではないかと心配です。僕がこの間読んだ本の中の言葉なのですが、大変気に入った言葉があったのです。「孤独の意識が増大して止まない時我々は悪循環を断ち切って、自分自身よりも大きな何ものかに属し共同体の中にある位置を占めようとする。仲間から孤立した我々は戦いの信念または反情の中に、あらためて仲間を見い出そうと望み、大した希望もなく、不条理を感じることに苦しみながら反抗から革命へ移ることを望む」という文句なのですが、僕はこの言葉に感動しましたね。マルクスの論理や某革命家の言葉よりも今の僕は感動したのです。単純と思われるかもしれないが、今の僕にはこの様な言葉が必要だったのかも知れません。僕もデモに何度も参加したし、集会にもよく行きました、そして某セクトに入っていた訳ですが、僕自身御堂筋や河原町の隊列の中にいて、「革命斗争云々……」などと叫んでいても、実のところ「革命」なんて考えてもみなかったですね。「革命」という言葉がなんか空々しく聞こえましたね。それに「沖縄斗争勝利」などと口で言っても、それら虐げられた人民や社会の底辺にいる人々や飢えに苦しんでいる人々の慟哭の叫びみたいな苦しみを、関接的且つ理論的には理解できます。そして彼等をその様に追いやった奴等

へ権力者、スルジョワジー否我々かも知れないが）を、憎み、なんとかしなくてはと思いますが、僕の日常生活の中から直接的に肌で感じとれる様な時間帯は何一つなかった。こう言ってしまえば全ての諸々の事（沖縄、ベトナム、ビアフラ等）が肌で感じられる訳がないし（現に行かない限り）、そうではなくて、個々がこの様なことをいかに自分を環元する一要因としてとり入れるかが問題なのですね。そして苦しみや弾圧をいかに自分に環元して斗うかということなのですね。しかし、一般論みたいですけど、やはり人間というのは、一定程度はそれが可能だとしてもやはり無理ですね。だから「安保粉砕・沖縄解放」などと言ってもなんとなく空々しい気がするのです。「革命」とは何か聞かれたら今の僕の答えは「自己変革」につながるのではないかと思います。自己変革といっても意味は広い。全て社会組織機構、思想形態の中において、自己を変革することは容易ではないし、自分なりの思想形態を持つことは困難を要すると思うが、ただ自己変革と言ってもたとえば自分の好きな様に変革すれば、昭和元禄阿波踊りを踊れる訳ですが問題はその変革がいかなる方向性・パトスを持ち、何を媒介として行なわれているかということが重要だと思います。だからセクトの中に、自己変革というのは必要だし、社会や他の斗争形態の中にいても必要です。つまり意識を持った個々（意識の深浅にもよりますが）はそうして自分と斗っているのです。なにもゲバ棒を握り、ヘルメットをかぶって力ッコよく機動隊と衝突する人々だけが斗っているとは思いませんし、その様な中からチェ・ゲバラが誕生するとも思いません。だから変革しているプロセスにおいて、外部注入的に、直つドグマ的にセクトの理論が入って来たとしても、自己との斗いというものが否定的に扱われるならばセクトへの反発が生じると思うのです。たとえその様な形でセクトに入って斗いだしたとしても、セクトの中で自己変革は出来ますが斗いの限界が生じて来ることもあるのではないかと思うのです。こう言うとセクトの人々は「まさしくそれを乗りきって斗うと言う……云々」と言うかも知れませんが、自己の意識が行きづまりを感じ、自己が判断の限界に達した時その斗いは地から足が離れた浮遊した者になると思うのです。なにもセクトの建中だけが斗っているのではないし、内ゲバばかりで消耗していく人もいると思うのです。党派斗争というのは必要だとは思いますが、その為に㊙につかまって、二ヶ月――三ヶ月も警察に世話になれ

は、どうしようもないと思うのです。（かなりナンセンスと言われそうですが）自己の納得いく様な斗いの場所はあると思うのです。セクトの建中に言われれば、日和見と言われそうだが、納得いく斗い程長期的に出来ると思うのです。なにも10年がある為に斗うのではないし、その様な即実反応主義者的な論理は崩壊すると思うのです。もっと永続的論理を持つ必要があると思うのです。それにこの大きな社会機構の中にあらゆる反権力反体制的革命的「思想空間」を確立していくべきだと思うのです。もちろん今の様に物理的に確立された社会ではあっても長期的になるとは思いますが。だから、大学をバリケードで封鎖し、時計台に立てこもって、投石と火炎ビンで㊙と斗って権力の一角をマヒさせたなどと思うのはどうかと思います。もう大学をバリストなどするのは、昨年までの初期的な段階と思います。守るバリケードというのはいつかは、権力によって除かれるものですし、単に物理的に封鎖してもだめだと思います。セクトで斗うと主体的に判断したんはセクト信者となって斗えばいいのです。なぜならば斗うということは誰からも（権力は勿論のこと、親・他人）強いられたものではないし、自分自身が「俺は斗わなければならない。生涯を斗争にささげる」と主体的に判断した結果だからです。だからその様な人　三度の食事を一度にして チェ・ゲバラに続ける人だと思います。無責任な言葉ですが）しかし僕自身もセクトに入ってデモにも行きました。そこで感じたことを又述べますが、スケジュール斗争「何月何日大手前公園大統決起集会」アジテーターの人が叫ばんばかり演説、そしてデモにうつり㊙の壁の中を力ラフルなヘルメットの列が動く。そして途中シュプレヒコール、「我々は権力の弾圧をはねのけてまさしくこの斗いを通前の統一集会、「我々は権力の弾圧利した、云々」そして解散、ヘルメットを集め、旗をたたみ、汗をふきながらダループになって帰る。それで一様は終り、なんだこれは（僕は）どなりたいね。なにが弾圧？　㊙の壁の中をヘルメットと赤旗をもって行列しただけじゃないか。そしてアジテーターがそうやって総括のカッコイイ演説をしている。その時にでも沖縄人民は虐げられ、ベトナムの女・子供は殺され、戦火の炎が立ちこめビアフラやインドなどは大多数の人間がバタバタと餓死して倒れているんだよ。なにが斗争勝利だ？空しいよ。言葉の上だけじゃないか。「昭和元禄の夢破る怒れる革命の衝」みたいな気持では絶対にだめだよ。それに権力の弾圧なんて、こんなものじゃないよ。いつ以前の「レッドパージ」の様になり、我々に銃口を向けるかもしれないのだ。そして美しい街路が銃で打

たれ血塗られた死体でうずまってしまうかもしれないのだ。単にヘルメットをかぶりゲバ棒と石を持ち、权力と斗い、「ああーおれは权力と斗っている。战斗的なプロレタリアートだ」なんて思っていたらへこの様なことを考えだしたことじたいがもう私は）少し考え過ぎじゃないかと思いますね。それにデモに二度や三度出なくなったからと言って「なんだよナンセンスじゃないか・斗うべきだよ。日和見だよ君は……」なんて言っているのは全くどうかと思うし、ひどいのになると「日和見＝スル転」なんて言うのがいるらしい。ここに到っては全くお話にならない。オーに日和見て一体なんなのか理論的に説明して欲しいものです。

しかしこの頃に今迄の僕の消極的な参加も僕にとってはプラスになったところもないではない。なぜなら僕が大学に入ってそのまま何も知らずにいたならば、僕みたいな人間は圧翼でも左翼でもない単なる全くの無関心派のノンポリになっていただろうということです。'50年代の火焔瓶斗争前後に日共系の学生は工作隊員や地下組織に潜ったということらしい。今度の'70年の後も勿論その様に地下に潜ったり労働戦線で戦う革命家の様な人達も出て来るだろうと思うけれど、やはりその様な人は偉いと思うし、日本だけでなく各国の革命組織と連帯して本当に革命を指導していくのは彼等だと思います。だからと言って、今日の全学連反戦グループが〝眉つば者〟と言うわけではありませんが、本当にラディカルな戦いを行うならもっと地味なところから入って戦うべきだと思うのです。一国に何千人も革命家が生れるとは思いませんし、自分の生涯を革命斗争に献げるということは誰にでも出来ることではないと思います。でも彼等指導者を支える革命グループなどは必要だし、指導者だけで革命が出来るわけでもないと思うのです。

自分で一体何を書いているのかわからなくなったのですが（無責任ですが）僕が言いたいのは、革命家になれればなった方がいいし、又その革命を志して色々な芸術運動などから働きかけるのもいいと思うのです。それに大衆といっても、こと体制社会に入ってしまったら押し流されるけれども、その中に居ても常にその様な動きを観察して自己の判断で行動に参加して行く必要があるのではないかと言うことです。（極めて困難なことですが）つまり、たえず社会に出ても、ノンポリであってはならないと思うのです。革命を主体的に主導していくのはセクトであると思うし、労働者であるにしてもです——。

全共斗運動の位置づけ

学四　T・K

全ての産大の学生諸君！我々の学んでいる産大の状況をもう一度分析してみる必要があると思う。

一昨年のK君の10・21国際反戦デーの权力による不当逮捕による処分撤回運動、そして一昨年の代々木執行部に対する大学当局＝右翼によるリンチ事件から一年余月がたったが斗いの火の手、いや火さえ、煙さえたたない状態である。我々は、そして当然私自身もこの状況を深く反省しなければならないし、それと共に自己批判しなければならないだろう。そしてもう一度かつての東大斗争・日大斗争・京大斗争、そして全国学園斗争を総括しなければならないだろうし、又そういった質的な問題を語らなければ、我々産大においての斗いを語れないことを確認しなければならないだろう。特に日大斗争は我々が蜂起しようとしている産大においては非常にいい例であろうし、重大なポイントを持っているだろう。又我々においての状況は、特別な状況を持ったものではないはずだ。概念的ではあるが、学園解放という論理的な展開から階級斗争すなわちプロレタリア独裁へ向って展望性を持たなければならない。そういった形での論理は明確に反权力、すなわち＝右翼・国家权力＝機動隊、そして秩序派、日共＝民青に対して断固斗うという強力な意志統一を行なわなければならないだろう。すなわち軍事的・政治的に圧倒的に高い質をもたなければならないだろう。

我々の産大においての斗争は、実して斗いだといえるだろうか・学園においての集会、そしてデモ、スティッカー張り、アジビラ配布、落書き等々は低い次元のものであった。しかもこれらさえも常に大学当局の飼い犬応援団・体育会系学生・右翼、そして当局御用機関執行部等々によって不当にも弾圧されてきた。そして正当とも言える処分撤回運動も同様な経過である。

こういった問題は、勝利だった筈だったと言うことより、はるかに以前のことだと言うことをはっきりとここを確認すべきだろう。私は勿論のこと、我々個人が先にも述べたように自己批判すべきであろう。

日大全共斗委員長秋田明大君は「我々の斗いは、マルクス・レーニン主義に基づいた共産主義運動を遂行していくのでは決してなく、学生

不在・教育不在の日大を真の大学として作り上げるべき正当な運動を行なっていることを明確にして欲しい」と述べている。そして我々の斗いは誰の為の斗いだったのだろうか。又今後も斗かって行くのだろうか。農民の為か。貧働者の為かそして市民の。あるいは産大学生の為か。我々は全ての問いかけに「ノウ」と答えるだろうし、私はそういう答を信じている。大義名分的なきれいごとを並べるのは嫌いだし、そんな甘いものではないと確信している。私は誰の為にも斗かってきたのではない。明らかに自分自身の為に、学問していく為に斗かってきたことなのであると思う。

ここで学園斗争について、私の貧弱な頭脳、そして低い次元のものではあるが少し語らせてもらおう。

昭和41年、早大斗争に始まる学園改良斗争が、早大・明大・中大等々の斗う部隊によって「授業料値上げ反対」という要求をもって、大学当局権力に向かっての斗いとして行われてきた。しかし、国家権力＝機動隊によって、永久的バリストは当然のこと、要求さえも勝ち取れず、常に斗いは圧殺されて敗北を余儀なくさせてきた。ただ一つ中大において「白紙撤回」という形だけしか勝ち得なかった。しかし昭和40年10月8日第一次羽田斗争以降においての貧働者・学生・農民そして市民が強く団結し、反権力斗争・ストライキ突入ジーク打倒という形で斗いが蜂起された。まさに全人民の貧的な高揚を示す結果となった。そうした中において東大医学部無期限ストライキ突入、そして20数億円の使途不明金の発覚による日大斗争の勃発。先にも述べたが、これら早大・明大・中大等々のような個別大学に於ける個別要求貫徹斗争のわくをはるかに越えて、帝国主義教育秩序総体に対して、すなわち大学の帝国主義的再編によって教育の帝国主義的質を内包した日本帝国主義という形態を取った"国家"に対する全国学生の総反乱という高い質を獲得したのであった。それ故にこそ、それは全人民の斗争と固く連帯した永続的・非妥協的な武装バリケード斗争として、国家権力＝機動隊、日共＝民青、右翼秩序派、大学当局等々の反革命分子と徹底的に斗い抜かねばならなかった。

東大全共斗の定義した「自己否定」という論理形態をとった「帝大解体」という理論。大学におけるさまざまな矛盾は、社会の矛盾としてまさに東大生であること自体がすでに犯罪者であるとし、全人民を抑圧してきた東京帝国大学を解体しなければならないという論理展開をし、斗う過程においての自己変革ということを明確にした。日大斗争もただ単に20

数億円という使途不明金のための斗争といった現象面だけをとらえるのではなくて、マスプロ教育、教育の帝国主義形態等々という営利追求のみに走しり、中堅所的者の養成機関として存在している大学に対し、自己の解放、学生の解放という形で斗いを展開した。しかし、ブルジョアジー、権力は1月18日19日にオオカミの大群ともおもえるあの青白く無気味に光るヘルメット・ジェラルミンの盾等の機動隊を8千5百人も東大に導入させた。自称左翼と称する日共＝民青さえも機動隊と結託した。東大安田講堂斗争はまさに68年全国学園斗争の高い質をはっきりと示す形で熾烈に斗い抜かれた。またそのことによって、全共斗会議と帝国主義国家権力との適対矛盾が全人民の前に明らかにされ、大学当局、日共＝民青、右翼等は完全に機能を失なってしまい、権力に大学の自治を売り渡してしまった。そして反動佐藤政府は「東大入試中止」を決定した。しかし国家権力は帝国主義的教育を維持し、強化させるには、東大・阪大・神大・岡大等々の入試を実施をしなければならなかった。「帝大解体・国家権力粉砕・安保粉砕」に向けての我々の斗いは断固東大入試を実力阻止しなければならなかった。

東大に於いての斗いは東大・日大斗争が長い間かかって積み重ねてきた質的なものをそのまま短い期間でもって獲得したものだということを確認しなければならない。そうした高い質をもった斗いであり、全国学園斗争を勝ち取らなければ、個別学園斗争を勝ち取れず、足んや東大斗争も我々が蜂起しなければならないが産大斗争も勝利できないことは明確なことである。しかし、大学当局権力と国家権力という二重権力の創出によって、学外入試・機動隊に守られての入試というハレンチな形で全人民の前に、奥田！大学当局はギマン性を暴露した。政治的・軍事的にも敗北せざるをえなかった。そして4月に入り、新入生を加えて新しい段階を迎えた。4・28沖縄デーにおい、政治的・軍事的にも断固斗い貫徹するという部隊を編成した。

沖縄は、日本帝国主義のアメリカ帝国主義の傘の下での東南アジア侵略の前線基地化という重要な役割を果し、ベトナム戦争への参加、日韓防衛外軍駐留といった諸々日帝侵略の要素をもち、沖縄を断固全人民・沖縄農民の内く者の手に返さなければならないという形式をもつものである。だが遂に、国家権力＝機動隊の圧倒的な数の前に勝利できなかった以后、大学措置法案粉砕斗争、10・10・21斗争、11・13～17佐藤訪米阻止斗争へと斗う部隊を強化していった。

'69・3・27
オ2号
○○学科
機関紙

僕達にはまかりなりにも機関紙らしきものができたけれど僕にはどうしても意見らしきものがまとまらない。五者協議会からの報告で暴力禁止という事がうたわれているが、これには誰も反対の者はいない。しかしこの暴力という言葉を規定する場合それぞれの立場から色々の解釈がされるはずであるから、どうもそれに簡単に同意することはできない。それらの事情もふまえながら意見らしきものを散文的にしか書けない事を残念に思いながら書いてみます。

今回の産大事件の場合はイデオロギーをぬきにしてはどうも考えられないのではないか！ 誤解があったにしろともかくイデオロギーぬきには考えられない。そして広く国内外のスチューデントパワーを見るからにはもはやまちがいないと思う。全学連がセクト化してそれらのセクトがある固有の思想性のある国家であることは否定できないが、しかしもはや紛争は彼等だけのものではない。これだけ深く広く波及するからには全派するイデオロギーにしろ目差すところは一つであるはずであるからそれへの過程に於ける人間的な自覚であると思う。そこでイデオロギーが現われてきてその病根たるや何であるか。あるいは、それに対する闘争手段を論じる場合に於ける違いがイデオロギーになってしまっていると思う。本来イデオロギーとは共同体の秩序そのものであったはずであるが現状では個々の人間的な悩みから内発したはずのものがやたらとイデオロギー闘争にすりかえられていることに怒りを感ぜずにはおれない。社会における個々の矛盾、不淨理等を考え悩み自分達の無力をなげき、又そうして自分自身をその泥沼にいやおうなしに引きずり込まれる。こうして自己矛盾に悩む若き人は過去いかほどであったかもしれない。そうした人々を単に正義の人と呼べるだろうか。過ちを過ちとして通せない社会に於いて誰しも悩んできたことではないだろうか。しかしどうした事を感じるには感じたが疑に発足した共同体において憲も一つの秩序となり、どれ一つでもそれを悪として追求できない程がんじがらめに固定化されてしまっている。どこにクサビを打ち込めばよいかも解らぬほどに。不淨理は理性の府にも体制化されてしまっていた。だから学生である僕達は学園を拠点としてということになるだろうと思う。そこで言いたいのは、では体制の破壊がそうしたものの解決と言えばそれは少し人間研究というか人間を忘れすぎているのではないだろうか。そうした不淨理、単に怠慢を例にとってみてもいいと思うが、個々の人間自身にそうした傾きがあるのだからそうしたことを無視し、ゆたらと体制、体制とかけ声をかけてみても大衆は舞らないのである。トーマス・モアのユートピア島など夢見だにしないだろう。大衆は利害を異にするものであり要するに自己本位なのである。そこに高度の自覚論をぶってもテコでも動かないのが大衆ではないか。ではどうすればいいのか。

オ一に自覚すること。しかも持続する日和見主義との闘い、それにほかに自覚を促すこと。それとこじれた体制にたえずクサビを打ちつづけることではないか。……色々と書こうとしても考えが言葉として表われない。でも感じとしてでも又ニュアンスとしてでも僕の考えが他人に反発をかうとか否とかは別にして）伝えられたら幸福だ。（ＫＫ）より

編集者の無責任により オ2号に載せる予定であった「産大暴力事件真相」が又次号になりそうです。どうもスイマセン。

"春休みに入ってから原稿が集まらず、俺達の機関紙も一体どうなることやらと心配していたのですが終りに近づくにつれ、各地のクラスメートから、たくさんへほんの3通ですが……）送ってもらい、今必死になってタリ切りをやっているところです。オ3号ももうすぐ出来上がる予定です。……けれど「予定は未定であり、しばしば変更され易い」と誰かさんがうまく言ったように、まだどうなるかわかりませんが、クラスで燃えようとしている火だけは絶対に消さない覚悟でやっていくつもりです。こんなエラソウなことを言える義理じゃありませんが、ま、一生懸命やってゆきます。世のうわさによれば、本校の若泉教授が今度『中教審』のメンバーに入るとか……。

本当にオ2号がおそくなってしまい誠に申し訳ありませんでした。

「編」

蟻の死

法四　Y・Y

冬のある朝
訪れはしないかと僕は恐れる
何が
何が訪れても
無関心を装って
黙々と無しそうにくらしている
善人達
理性の叫びも
獣の叫びも
金満家にはむずがゆいだけ
けれど僕は知ったんだ
蟻の穴がいつか大きな堤を崩れさすと
僕の恐れは
必ずや誰かをもおびやかすだろう
冬の朝の寒さは

それを忘れさせる
僕は寒い……　寒い
蟻の死が

「大学」との訣別

元営四　村林潤

京産大学　親第七一号
昭和四五年二月一六日

村林　潤殿

（保証人）村林知久殿
京都産業大学学生部長

停学処分の発令について（通知）

下記のとおり停学処分の発令がありましたので通知します。

記

経営学部3年　村林　潤

上記の者、学則第五十条により停学に処す。

昭和四五年二月一六日

総長　荒木俊馬

拝啓

春近しとはいえ、余寒なお厳しい折から、いよいよ御清祥のこととお慶び申しあげます。

さて、御子息潤君の件につきましては、昨秋以来、本学関係者において慎重に審議を重ねる一方、本人及び御家族との連絡も密にし、教育的な立場と本学の建学理念にてらして、その処遇を慎重に検討して参りましたが、同封通知書記載のとおり、このたび停学処分の発令をみるに至りました。

やむを得ず、このような結果となりましたことは、私どもといたしましても、まことに遺憾にたえないところでありますが、このさい、本学に負荷されている教育の社会的責任を果たすためには、学生の処分もやむを得ないものであり、また本人の将来等教育上の見地から考えましても、処分が適切妥当

であって、本人や御家族の理解が得られる限りにおいては、むしろ教育上の効果があげることができるものであるとの、判断に基づく結果であります。

したがって処分の程度、時期などにつきましては特に深い考慮が払われ、本人の勉学にあまり支障がなく、修学意欲を阻害しないよう、しかも本人が心の平静を得て、独り静かに反省の機会がもち得られるようにできる限りの配慮をされているわけであります。

この点につきましては本人は勿論貴殿の御諒解も得られることと存じております。

なお、本人に対しましては後刻面接の上、私どもから詳しく説明する所存でありますが貴殿からも今回の処分についての真意を伝え、本人が反省の上、本来の修学の決意を固めるよう篤とお伝え下さいますよう重ねてお願いいたします。

昭和四十五年二月十七日

敬具

京都産業大学学生課長

磯田敏二

この二片の紙きれが送られて来た時に初めて、僕と大学との間に〈接点〉が生じたと言ってもよい。それは、余りにも一方的であり、発言にしろ、行為にしろ、遂に噛み合わぬままであったにしろである。この二通の文書のどこを捜しても、僕が処分されるに至った〈原因〉は一句として書かれていない。この事は、一見看過されやすいが、当局の行なう処分と言うものが、どのような性質のものであるのかを明らかにしている。それは、大学当局が我々の思考↓行為↓結果と言う堅く一体になっているそれぞれをバラバラに切り離し、常に最後の結果のみを問題にして対処して来るということである。更にこの思想と肉体の分離は、〝人間教育〟なる教育理念が全くの御題目に過ぎず、産大の教育なるものが、学生からの金集めと、それらの学生を企業体に提供することに過ぎないことを暴露している。

学生部長は言う「戦争に反対するということは、私もそうだ。しかし学校に迷惑をかけてはいけない。どうしてもやると言うのなら、ヨソの大学に行きなさい」と。これだけの言葉にしてからが、なんとメチャクチャなことか。反戦に賛成だと？　そりゃ大いに結構。しかし問題なのは、それではその反戦の意志をどのように具体化するのかということなのだ。そして反戦＝戦争による肥大を狙っている資本・帝国主義総体に対する闘いの日である10・21国際反戦デーに参加した僕の一体何を処分しようというのか？　更に、闘いの高揚を弾圧するために躍起になっている権力でさえも、立証＝起訴出来なかった誤認逮捕がどうして学校に対する迷惑なのか？　その「学校」とは何を

指しているのか？　学長なのか？　学生なのか？　資本に示している看板なのか？　その上、主体としての自己が自ら真実を求め、その実践としての諸活動をするという余りに当然すぎることを、何故ヨソに行ってしなければならないのか？　もう彼等の論理の破綻は明らかだろう。いやそもそも大学当局などに一片の論理・理念などある筈はない。「産業大学という名の営利企業」という発言に対し、「失礼だ、その言葉を取り消したまえ」と公席まがいのメモの手を止めて怒鳴ったり、反戦と戦争責任や大学の今日的課題等の連関に何一つ答えることが出来ず遂には「嘲笑っている」とヒステリックに叫んだりする以上のものではないのだ。

大学当局の実体がこれ程低劣であり、処分が余りにも意図的でありながら、僕は敗北した。それは、当局の政治的処分の第一弾であった東大闘争参加者退学処分白紙撤回闘争を徹底的に闘わなかった当然の結果であると同時に、常に受動的であった自己自身の敗北であった。その時点で処分撤回闘争を展開しうる組織的力量の欠如など直接には問題ではないのであって、自立した闘いを何一つ貫徹出来なかったことこそが敗北の質を規定しているのだ。処分決定機関たる学部長会議への出席＝自分の処分を決定する場における発言権の確保という最底限の権利さえ充ち取ることが出来ず、試験や学費納入等のメリットを用する大学当局に有利な、時間の流れにはまり込んでしまった。

今ハッキリと言えることは、たとえそれが〝自明の敗北〟しか結果しないにしても最後まで闘い抜かなければならなかったということだけである。断片的にしか知ることが出来ないが、たとえば神大の松下講師や関学の草自同（革命的自立者同盟）が志向し、展開した闘いのあり様は僕に強い衝撃を与えた。自立した闘いを徹底的に追求する者達が構築する〈組織〉こそ、先れ合いや〝機関〟化した現在的組織を否定するという予感を現実化しなければならない。

僕はかつてこう書いた「……先にも書いたように〈処分〉が持つ大きな効果は、学籍伝々であるよりは、多く就職への保証を取り消すことにあり、学生に対して将来の喰い扶持を左右するという恐怖を与えることにある。そのことを十分承知しながら、そして〝日記〟を一時の便法として書けば処分が解除されることが確実でありながら、私は拒否しようと思う。情況がこれ程までに逼迫した時に大学などにどんな意味があるかと言い切ることもまたたやすい。しかし、この自明の地平に至るのに〈処分〉という契機を経なければならなかったという後ろめたさを離さずに〝学生〟の身分から訣別しよう

と思う……」（同人誌「究」第二号）

「学友諸君！　授業を受けるな！　こんな所を出て行こう！」と悲痛に叫んだのは、怒濤のごとき日大闘争が極力の集中弾圧によって困難な局面に立った頃の日大の一学友であった。産大当局によって処分された、少なくとも二十余名（陰険な強制自主退学を加えれば倍以上になろう）の誰一人（自分自身を含んで）として問題を公然化し、対決点を明確にしないまま、個人的な問題として解消していってしまった。先の日大生の叫びをも噴出させることなく、産大という現在的な場から離れていってしまった。全ての処分者達が、自らの弱さの証明でしかないこの屈辱を内燃させ、一つの怨念として定立しようとしているにしても、大学当局と我々との間の矛盾点を、もっとも端的に示していた〝処分〟の持つ意味を一般化し得なかったことの責めは受け続けなければならない。

今迄の産大における種々の闘いの、その時々の欠落の要素を指摘し、技術主義的に繕うとすることは、余り関心がない。それよりも、情況の動きに敏感ではあった我々が、ほとんど情況を切り開いていくことが出来なかったという構造自体に焦点をあてねばならないだろう。そして、その時問題とされるのは〈情況〉を設定し、領導していく主体的力量の決定的な不足である。確かに、その時の組織体は存在した。しかし、かの〝全学闘〟を始めとして〝10・21闘争〟〝6闘争〟等は、真の闘争実行者〝〈組織〉には成り得ていなかった。そこにあったのは、多分に組織体に先れ掛り、組織体の運動を支えるべき構成員の営為が脱け落ちるという構造であった。我々が、一つの思想的小集団、闘争的フラクを含んだサークル、又はクラス闘争委などを創造し、活動を続けられずして、大きな単一組織の成立が保証されず皆は無いし、上からの組織化は常に破産に直面することを知らねばならないのだ。我々の闘いが全ての関係性を問い糺したように、我々は我々の組織体の存在をも検討し直さなければならず、自立した闘いを志向する小集団・個人の連合体を新たなイメージとして提示しても良いのではないかと思う。その全てが、具体的な行動にかかっているのは勿論であるが――。

安逸な秩序と、惰性な日常が、恐ろしい時間性となって、我々の風化を促す時、僕は、処分を頂点とした産大における自己のあり様を基底に据えて、自己の課題を果していかなければならないだろう・そしてこのことが、僕の産大闘争への関わりが永久的に続くことの証左なのだ。

総括篇

斗いつつ学び、学びつつ斗う――の実践として、三回にわたって〝自主講座〟が開かれた。

44年2月15日　花園大学助教授　小野信弥
「日大斗争に学ぶもの」

4月28日　自主チューターと討論

5月7日　京大講師　池田浩士
「合法と非合法」

京大教養のバリケードの中で、毎回数十名を結集した〝自主講座〟の意味を明らかにするために、当日配布されたレジメを再録した。

自主講座の意義

はじめに我々は正規の授業ではない自主講座が何故必要となったのか、その背景を認識することなくその意義について語ることはできない。それには正規の授業の本質とは何かを知らねばならない。

〈建学理念の精神「産学協同路線」の本質〉

我々の学校、京都産業大学は言うまでもなく産学協同を建学の精神として設立されたものであり、一般には「社会に役立つ人間に」という欺瞞的言葉で表わされる。何故欺瞞的かは以下で明らかにされるであろう。産学協同路線とは果して真に社会に役立つ人間を造り出すのであろうか。そしてその社会とはいかなる社会であろうか。言うまでもなく産協路線のいう社会とは独占資本の社会であり、独占資本に役立つ人間ロボットを造り出す以外の何物でもない。故に産協路線をふまえた大学とは資本主義社会における独占資本に、中堅労働者を供給するための産業予備軍（失業者とは異なった意味での）養成所なのである。そのために、大学＝養成所においては独占資本にとって必要十分なもの以外は何物をも学ぶことが許されないのは勿論、独占資本本制を侵略するものはすべて排除・壊滅されるのは当然の事である。その大学内における現実的な活動として検閲制度が厳として存在し、言論・思想・表現の自由が徹底的に踏みにじられているのである。今の我々は産業予備軍養成所としての大学当局から与えられるごく限られた独占資本の論理以外は学ぶことを許されないし、それを拒否する事すら許されてはいない。

自主講座実行委員会
S44・2・15

閥制度・右翼暴力団等によって弾圧して来るのである。まさに我々はマスプロ教育により去勢され、弾圧機構により人間放棄を強制されているのである。このような産協路線というレールの上を走る産大で飼い殺しにされてゆくうちに我々はロボットと化され、やがては何事にも無気力で強者の言いなりになるマイホーム主義者へ、労使協調的労働者へ、政治的無関心者へと造り変えられてゆくのである。

＜自己の解放と変革、反動への連続攻撃の場としての自主講座＞

では大学における教育・学問とは何なのか。それは我々一人一人が主体的に参加し創造してゆくものであって、現在の没主体的、非人間的教育・学問を強制している大学当局こそ学問の敵対者である。真の学問追求する立場にいる我々大学生こそが、学問の敵対者に対しては厳しい鉄槌を加えねばならぬ任務がある。その任務を放棄することは、自らの人間性をも放棄することであり、全人民に対する裏切りであって断じて許されない。我々は我々の手で真の学問を、真の大学を取り戻さねばならない。そこに産協路線という大学の秩序に対する学生の秩序の対置としての自主講座という挑戦状が存在しえているのである。

産協路線の本質を見抜いた者は、今までの、そしてこれからの産協路線授業に対して「ＡＮＴＩ（ノン）」を叫ばねばならない。そしてその「ＡＮＴＩ（ノン）」の現われとしての、また反動教育への叛逆としての自主講座を編成してゆかねばならない。学生自らのカリキュラム編成による自主講座こそ、有害以外の何物でもない反動教育すべてに対する拒否であり破壊である。我々は自主講座を通じて産協路線の反動性をさらに暴き出し、自らをその呪縛から解き放ち、新しい自己へと変革してゆかねばならない。つまり自主講座とは単なる没主体的な講演会でもなければ意見の交換会でもない。自己変革の場なのだ。常に「自分は今、どうすべきなのか」と問いつめてゆく闘争の場なのだ。

産大において初めてその反動体制に僅かばかりの動揺を与えたかの如く錯覚されている一・二七、二八事件前後の状況も反動体制強化の過程に他ならず、民主的学反の必死の抗議もその反動の暗闇の中へ葬り去られようとしている。産大における反動体制とはそれほど強固なものであり、かつ我々の叛逆とはそれほど微弱なものであるのだ。我々はたとえ抗議の叫び声をあげてもその瞬間ロごもらざるをえない状態にある。そしてその表現の困難さを逃避という没主体的行動に

よって示す以外に方法はなかったし、我々の叫びを論理的に展開できえる確固たるものも欠如していた。しかし我々は今、自らの言葉を、行動を求めねばならない。我々の志向・パトスの整理・肉付けの作業を通して我々自らの主体的な、既制の反動体制に対する叛逆の烽火をこの自主講座の中よりあげねばならない。

＜バリケード内での意義＞

第一回の自主講座が京都大学のバリケードの中で行なわれた事の意味は実に大きい。バリケードとは、自主講座と同じく大学の秩序に対する学生の秩序の対置であり、叛逆の現実的・物理的表現である。そのバリケードの中は学生の秩序のみが存在する解放区であり、全てが人間性を回復するのである。それゆえに、バリケードに守られて行う自主講座は反動秩序の介入できえない真に人間性を回復できる唯一の場であり、自己の解放と変革の可能性を追求できえる唯一の場なのである。

しかし我々は京大のバリケードの中で満足すべきではない。反動の拠点＝産大を見逃す事は結局、逃避に他ならず我々産大生の真の解放と変革はありえない。我々の当面の闘争の場を産大内に持たねばならない。我々は第二、第三の自主講座を真正面から連続攻勢とする為にも反動の拠点＝産大構内での自主講座の烽火をあげねばならない。そしてそれをより確実なものとするために再度、「なぜ産大内では開けなかったのか。学外においてさえなぜこうも警戒しなければならないのか」という素朴な疑問に挑戦しなければならない。そうすれば自ずと我々の攻撃目標の照準が明確となってくるであろう。（Ｓ）

〝闘いのために〟自主講座 ‖第3回‖

Ⅰ 産大の現状
Ⅱ 産大の本質
Ⅲ 何をなすべきか

自主講座実行委員会
S44・5・7

本日の自主講座に結集された全ての先進的学友諸君

我々は、京都産業大学における現状を分析することにより、またその本質を追求してゆくことにより、矛盾と不当性への憤満を感じた。そして我々は、この場に結集された諸君とともに、また圧倒的多数の学友諸君とともに産大民主化を追求し、闘うと同時に、大学とは何か、真理とは何かと考える必要があると考える。

現在、産大において、我々は学生‖研究者としてではなく、まことに物‖商品としてあつかわれているし、そこにおいては、我々が産大に対していだいていた願望（‖研究すなわち真理探求の場としての大学）がまったくの幻想でしかなかったし、労働力商品の生産工場としての役割しか持っておらず、まさしく、我々自身が商品にされていることを明確に認めることができた。すなわち、マスプロ教育、右翼偏向教育、体育会偏重、完璧な検閲制度、自主的活動の制限 etc. により、我々の主体性をなしくずし的に喪失せしめ、右翼‖ブルジョアイデオロギーを注入しつつ、まさに産大の背後に存在する黒幕であるところの独占企業が使いやすい労働力商品‖没主体的・体制盲従的な人間（‖期待される人間像的人間）に転化させる機能しか持っていないことをはっきりと確認しなければならない。

そして我々は、次の三点を明らかにしなければならないだろう。

Ⅰ 産大の現状とはいかなるものか？
Ⅱ 産大の本質とはいかなるものか？
Ⅲ 我々は何をなすべきか？

Ⅰ 産大の現状とはいかなるものか？

現在、産大においては、荒木・小野による徹底した弾圧体制を完成させ、本年度卒業生のなかから右翼テロリストを大量に職員として雇い入れ、また・直接的暴力集団としては、荒木会、精神科学研究会（‖〝主長の家〟系）、現代法制研究会（日学同系）、及び体育会 etc. を従属させ、先進的学友に対する赤狩り（‖レッド・パージ）を行なっている。そして、それを合法化するために、政治活動の禁止、言論・集会の自由の抑圧、検閲制度 etc. を学則（学生々活及び課外活動に関する規則をふくむ）に盛り込んでいる。具体的には、①学則のあらゆる部分にみられる許可制と承認制（内実ともに完全な検閲制度）、②志学会役員及び規約の総長承認制度、③政治活動の禁止（教育基本法第8条の規定〝大学の政治活動の禁止〟を〝学生の政治活動の禁止〟に歪曲）、④学則の内部における学園（学部・学年・章、第12章6項と第13章の義務の決定機関の相違）、⑤大学内の生活のみならず、一般社会にあるべき私生活までの徹底した統制等々が主要なものとしてあげられるだろう。くわえて、学則の改悪に際して、我々学生の生活に最密着した面における改悪を学生に何らアピールせずに行なっている。（このことは、当局の反論もあろうが、現実として、学則を暗記しているものはいないのだし、新しい学則に〝改正〟と文字をくわえても、どの部分が改悪されたのか明確にはならないし、それではその部分を明確にしてみよう。

①学則第13章に定める〝費員の諮議機関が〝教授会〟から〟勝に定める委員会〟に変更されたこと（このことは非常に大きな意味を持ち、処分に関し全く当局だけの意図で自由にできる）

②学生生活に関する規則第3・第4条の政治活動禁止項目の附加

③課外活動に関する規則第8条の附加により、弾圧対象が課外活動に属さない学友にまで拡大されたこと

等が特に主要なものであろう。

次に、当局‖右翼暴力団学生の具体的な弾圧例を

あげておく。

①昨年の某サークル主催のベトナム反戦の講演における析木会を中心とした学生のヤジなどによる妨害（この時の講師は同志社大の鶴見氏。この講演を許可したことが早川前学生部長更迭の直接原因）

②昨年の神山祭直前における某サークルの一学生の論文検閲の際の早川前学生部長の発言＝〝君の論文は明確にアカだ。しかし、私は君の思想がアカなのではなく、君の選んだ資料がアカがかったものばかりだったのだと思う〟（これは学生を全く研究者と見なしていないことに由来するだろう）

③昨年の10・21に大阪御堂筋において誤認逮捕された学友に対する不当処分及び〝政治活動はしない〟という誓約書を書かせたこと（昨年においては〝政治活動の禁止〟は明文化されていなかった）

④本年1／27・28における析木会・体育会・精神科学研究会・現代法制研究会・考古学研究会等々の学生による志学会リンチ事件（事件の概略↓1／17頃〝学園封鎖……〟の意味の出所不明のビラが大量にまかれ、これに対し、当局は20日頃より大学敷地内及び入口の坂にバリケードを築く。そして〝全学連が27～28日の日米会談粉砕のための処

点校にしようと押しかけてくる〟とのデマゴギーを流した。これに呼応した形で、志学会はバリケード封鎖反対の声明をだすと同時に、激しく反トロツキストキャンペーンを開始しつつ、総長とのボス交渉を要求したが拒否された。そして27日午後3時頃から、志学会関係者は〝学内において赤化運動をした〟との理由で石翼テロリストに監禁されリンチを受けた。この時、同時に先進的学友の数名がリンチ部屋へ運れて行かれた）

⑤④に関連したことだが1／31に右翼学生が当局に〝大衆会長〟なるものを申しこんで、当局より弾圧（レッドパージ）を強化するとの確約を取る。（内容詳細については口述）

⑥ついで2／12、全学集会をデッチあげ、志学会及びその付属機関を解体し規約成立まで、〝六者協議会〟が仮執行部として機能することを決定した。（六者協議会＝文連、体育会、応援団、放送局、新聞局、一般学生で構成され、実態的指導权は右翼が握っている）

以上の6事件と前後して、大学内における種々の暴力的弾圧が加えられた。例えば、東大紛争が起った頃東大の近くで右翼にみられた学友が拉致されたり、沖縄三大選挙のバッチをつけていただけで、呼びとめられ、バッジをとられ追いかけられた学友もいる。更には沖縄と書いたバッジをつけていて、学生課の職員に恫喝された例もある。

それではこのような弾圧や暴力がなぜ起るのか、当局はなぜこのような弾圧体制を必要とするのかを次にみることにより、産大の本質を考察してみようではないか！

Ⅱ 産大の本質とはいかなるものか？

我々及び先進的学友諸君に対する弾圧や、すべての学友諸君に対する抑圧を当局は何故必要とするのか。それは一つには、まさしく当局が我々学生の主体性を恐れているからにほかならず、産大が資本主義のメカニズムの中に組み込まれた企業体であることに由来するのだ。ここで注目すべきものは、荒木発言〝産大は私の大学だ〟小野発言〝大学は企業体である。企業であるからには、客（＝企業）の欲する商品（＝学生＝没主体的労働人形）を大量に作る必要がある〟大石発言（大石のみならず、大多数の教授の発言）〟産大の体制が気にくわない奴は産大から出てゆけ！〟等々のことであろう。ここにおいて産大は、労働力商品の生産工場であることがオーに明確にされた。オ二点は、産大体制と政府の中央教育審議会答申との関係を暴露することにより明らかにされるだろう。中教審答申委員として小岩秀二郎、君泉敬の二名が本学より就任しており、答申の内容としては、次の4点があがるだろう。

①教育法の歪曲による学生の自治活動の制限と政治活動の禁止

②副学長制（副学長二名のうち一名は文部官僚）

③入試制度の撤廃と内申書による選考（高校生活動家の入学阻止）

④大学院大学構想と目的別大学構想（これは完全に企業及び現在の資本家が要求している）

学友諸君はこれをみて産大の体制を思い浮かべるだろう。現在、産大において①②は明文化され、③④においても事実上行なわれている（③＝推選入学は志願者の殆んど全員入学、④においては産学協同）　これからわかることは、まさしく、政府の大学直接支配構想の実験台として産大があるということを示している。そしてまた、文部次官通達〟警察官の学内立入りの最終決定は警察にある〟があげられるが、警察官はおろか、パトカー、自衛隊員でさえ、産大においては従来から立ち入っている。それどころか電子計算機は、自

衛のためにあるようなものではないか！　これらのことが意味するものは、明らかに政府＝ブルジョアジーと産大の癒着した状態、言いかえれば、政府の完全な支配のもとに産大があり、国家によるブルジョアイデオロギーのうえこみが産大の主要な任務としてあることであろう。それでは、その任務は何のためにあるのか？　言うまでもなく、労働力商品の生産と同時に、体制的人間（＝体制を批判しない人間）を製造すること、そして、最大の存在理由はまさしく、国家の、政府の、またブルジョアジーの統治機構の一環であるという点にあるのだ。そもそも現在的なブルジョア民主主義的形態の国家とは、資本家の利益を擁護するためにあり、少数者である資本家の擁護のためには、全人民を武装解除し、資本家に追従するところの武装した特殊な機構としての軍隊・警察が必要であり、まさしくそれを包み隠すために法律が存在しているのではないだろうか？　そして我々はここにおいて、大学とは何か、との問を考える必要があるし、それ以前に、もちろん学問とは何か、科学とは何か、を徹底的に究明してみる必要があるのではないだろうか。学問とは、科学とは、本来体制を批判することより生まれてきたし、歴史的にも明確に体制批判（意識的、無意識的によらず）が行なわれてきた。真理は唯一であり、時の学者は、その真理を追求することにより、体制を批判し、弾圧をはねかえし、変革、また革命の原動力を形成してきた。歴史は、まさにその過程にあったのだ。その観点をもって現在の大学をみる必要があるのではなかろうか？　たとえば、かつて天皇制のもとで、大学は弾圧に対して、批判を継続できず、いや当初より殆んど批判らしい批判を行なっていなかったが故に、帝国主義戦争を背後より援助したことになったのを我々は思い出す必要がある。まさにその様な観点でいわゆる国立大学協会（＝大学が自らの首を締めるといった自主規制路線）を明確に糾弾できるだろう。そのような理由とも相まって我々は、大学は、学生は現在ある制度に安住してはならないし、ましてや、中央教育審議会答申、文部次官通達の逆行するような政府＝ブルジョアジーの干渉を絶対に許してはならないし、むしろ、これを粉砕、突破しなくてはならないのだ。

これまで述べてきたような政府の、ブルジョアジーの大学への介入は、必然的に、大学問題を全人民的なものへと飛躍させるであろうし、産大における闘争とは国家権力及び秩序派との直接的な闘争として発生することは自明のことである。それは日大闘争を、政府

＝右翼＝当局もそれなりの総括をしており、我々の闘争が日大闘争と同じ経過をたどるならば、我々の闘争は明確に敗北するであろう。我々は、自明となっている機動隊の導入と彼等の弾圧と当局＝右翼との結託を、危険を侵して確認する対を必要としないと考える。我々は明確に日大闘争の総括をふまえ、闘いを開始する必要があるし、その限りにおいて、まさしく国家権力の登場と機動隊による闘争圧殺が明確な形で表われることを確認できる。それでは、以上のようなことをふまえ、我々は何をなすべきか提起したい。

Ⅲ　我々は何をなすべきか？

我々は産大における現状分析、実態暴露を確認した。それでは次は何か。大学内部においてはもはや、闘争＝具体的な闘争の準備が行なわれねばならず、大学外においては、中教審答申粉砕闘争を闘うと同時に政府のいわゆる闘争圧殺行為に対し断固、鉄鎚を加える必要があるだろう。すなわち、我々の産大斗争は当局と政府＝ブルジョアジーの癒着状態が確認される現在、政府そのものを攻撃する闘争へと、当初の段階においてすでに飛躍していなければならないだろう。それでは、政府を攻撃する闘争とは何を意味するのか。それはまさしく現在、アメリカ帝国主義に続く帝国主義として、西独帝国主義とともに成長してきた日本帝国主義を攻撃することである。それは必然的に、国際反革命同盟として存在する日米安保条約に対する攻撃であり、日帝が帝国主義の絶対的軍事的基礎である帝国主義軍隊を組織し得ない段階にあっては、安保粉砕闘争は、反戦闘争の一大重点としても存在するだろう。現在的に教育の統制を行ない、労働運動を押圧していることは、まさしく、国内社会秩序の帝国主義的再編であり、日米安保のヘゲモニーの日帝への移行、すなわちアジア独自侵略構想（＝帝国主義侵略戦争）の先ぶれとして表われているし、自衛隊の三次防、四次防がその具体化されたものである。そしてまた、このような帝国主義戦争が終局的に、人類の破滅へと継がるものである限り、学園闘争を乗り越えた観点、反戦闘争の観点からも断固、国内社会秩序の帝国主義的再編を阻止し、粉砕する必要があるだろう。すなわち、我々の学園闘争が必然的・不可避的に他の闘争と連帯されなければならず、単に個別学園闘争としては存在しえなくなることを確認する必要があるだろう。したがって、我々は、現在的には産大における闘争を具体的に

準備し、街頭における反体制闘争を明確に担う必要があると考える。

スローガン

一、検閲制度撤廃！

一、政治活動・思想・表現・集会の自由を勝ちとるぞ！

一、反動教育粉砕！

一、我々の学費を我々に還元せよ！（経理全面公開）

一、7号館（学生会館）自主管理を勝ちとるぞ！

国力諮示と70年安保の奉制、文化領域全面を権力＝資本の下に従属させんとして用かれる大阪万国博に対し、全国のべ平連を中心にして〝反戦のための万国博〟69年8月に開催された。産大べ平連も、連日十数名が結集して積極的な行動を展開した。次に掲載するのはメンバーの一人の反博総括である。

ハンパク総括

産大べ平連

去年の暑い暑い夏の最中、八月七日から十一日まで大阪城公園でもって、全国の闘う労働者・学生等が結集し、「万国博って一体なんやろか」という様な調子で、それ（万国博）に対抗しようとした訳なんですね。それで、我が京都産業大学べ平連の勇士達も、「いざゆかん」と意気込んで、それこそ何か英雄気取りで出発したんです。

我々は、「万国博が一体なんやろか」なんて甘い（我々、闘う産大生にとっては）問題はさておいて、「産大体制粉砕」といった力ッコいい問題を、日大・東大をひっとうとする全国の大学全共斗、さらには反戦の労働者諸君に提起しようと、それこそ甘い幻想をもって、七月頃から準備に取り掛ったんです。なれない文章を書いたり、本当に力ッコいいアジビラをまいたり、それこそ産大を改革（解体）するのは我々をおいて他にはないんだといった調子でやったんです。

さて、大阪城公園に着いてみると、何か、京都駅のテント村を思わせる様なデッカイテントと、ボーイスカウトがキャンプしているみたいな小さなテント（もっとも、我々もこのようなテントなんです）が、幾つも建っていて、その間に、各大学全共斗、その他のグループごとの催し物――アッピール文のタテ看・佐藤栄作の墓碑が・並んでいるのです。それで、ケッ気にはやる我が産大べ平連も、負けじとばかりに、三本の旗を、内心「産大の本旗」を見りゃ周りの奴ら驚くだろうなんて思って張りたんだけれど、実際はその逆で

だれ一人として見向きもしないんだ。それどころか軽蔑したように（ひがみかもしれないが）見る奴もいたくらいで……。

『平凡パンチ』という、非常に我々の目を楽しませてくれる週刊誌に、うれし悲しや、我が京都産業大学べ平連が設立した『京都産業大学亡命学部』ってえ、産大の中において最も程度の高い学部の事が、七月ごろに、ヌード写真や何かと一緒にのせられたのである。このこ命学部ってえのが、産大の近い将来の姿の青写真なのであって、我々産大生が、この自民党お気に入りの産大を、全共斗をはじめとする斗う先進的産大生諸君が、「解体」した後の大学像なんだ。てえ意気込みで、設立したのである。しかしながら、事実は、これとは全く正反対に、本当に、斗う学友諸君から見れば、「バカ」に見える位、この学部、まったくもって程度が低く、ケッ気にはやる我々にとっては、そんな時間のかかる理論よりも、解体（物理的）の方を、がっついたため、わずか半月足らずで、逆にこちらが「解体」したのである。そして、こんな学部のことであるから、平凡パンチにも「ズッコケ分子」てえ、代名詞を付けられた次第なのである。（平凡パンチの出版社に火炎ビン投げるぞ――）

さて、テントも張り終わり、一段落ついたのであるが、期待した、「産大体制ってどんなの」て討論をふっかけて来る奴は、誰一人としていなかった。（非常に、すっかれた期待だったのかな）そういうと、この期間中に、討論したっていえば、ごく近い間柄の連合大全共斗の斗士達とだけなのである。そこにおいて我々が、精一杯吸収した事と言えば、「理論の未熟さ」これだけである。我々はここに来る前、「産大は関西における日大」なんて、日大全共斗の諸君が聞いたらおこるような事を、大胆にも、ほざいていたのである。

夜になると、警備（右翼・官憲・狂犬に対して）につくのであるが、関西の日大と自称する我々は、産大の斗士たらしめるのは、今をおいて他には無いとばかり、ゲバ棒片手に、右翼退治に参加したのである。

我々は、産大学内にあいては、借りて来たネコのように、非常におとなしい存在であって、それは、もう右翼のお兄さん達に会うと、そりゃもう「ニヤロメ」とも言えない位、シャンボリと静まりかえるのである。だから、警備においては、ここぞとばかりに、イイカッコをし、それこそ本当にヒッピー顔負けのイイカリコをしたんだ。それにはいウ々訳らしきものがあって、日大・東大全共斗の諸君らのすぼらしさ、ゲバルトを、悲しくも、マスコミという体制社会主義者を通じて、見すぎたせいか、ゲバルトゴッコにたいへんあこがれてしまったのである。

産大べ平連内部においても、「べ平連運動をしていて、産大斗争をになえるのか」「産大べ平連運動は、斗う姿勢があるのか」「べ平連とはなんだ」等という小田実さんが聞いたら喜びそうな言葉が出て来たのもこの頃である。最も、インテリゲンチャー的斗士の多い「べ平連」に、我々のような、産大の生み出した、ゲバルト好みの落し子達が、いずらいのも、もっともな話なのではあるが……。

産大べ平連を設立（と言っても、名前だけなんだが）した当時、「個々の斗争の重視」なんて、難しい、大切な言葉を合言葉のようにしていた我々だったのではあるが、ここにおいて、日大・東大をはじめとする力ッコいい諸君らを見ては、もうそんなことはどうでもよくなってしまった。

このような難しい問題をかかえてかどうかは疑問なのであるが、プロレタリアートを名のる我々が、次の日あたりからパチンコに行ったり、非常に高い（二五〇円も！）飯を喰いに行ったりし始めたのである。我々と違って、程度の高い諸君なんかは、「その是非はそのような外的問題ではなくして、個々の内在的問題なんだ」って、おっしゃるかもしれませんが、とにかく、我々は、このころから、消耗しだしたのである。その消耗した原因が本当にバカげていて、もう言うのさえいやになるんだが、連帯を重んじる我々、戦斗的産大べ平連の内にあって、夜になると、家へ帰るという、体制内在的家族主義者が、ゾクゾク出て来たのである。もうこのような事態に面ちゃくっては、万博どころか、本当に「斗う意志があるのか」ってドナリたい位なんだ。

このような、思わぬ敵に出会った我々は、ひとまず本当に逃げるようにして、一日早く京都に退散したのである。我々一人一人が、どのように考え、どのように戦いたかは、知らないのであるが、とにかく産大べ平連（集団としての）は「解体」したのである。しかし、本当にしかしながら、ここにおいて、一人一人が意識したかどうかは、とにかくも、個々の「内在的べ平連」が、設立されたのである。（このようなことを聞けば、これこそ本当に小田実さんは、喜ぶだろうな）これは、産大斗争の一端をになう我々にとっては、非常なる前進になるであろうとうぬぼれているのであるが……。

ここで「前進」と言ったのは、何も「中核」の諸君の機嫌を取ったのではなくって、本来斗争は、個々の

内的な問題を提起したところから、つまり、外的な問題（权力・大学等）が、いかに内的（肉体の内部）にかかわってくるか、というところから、外的問題を内的問題に還元し、そこから再度、外なる权力等の敵にいかに斗いをいどむかという問題だと思うのですね。ここにおいては、もうあのようにカッコイイゲバルトゴッコは、もう少し置いとかなくちゃならないような気がするんです。と言うのは、我々は再度、この時点において、自己のこれまでの総括をし、個々の内在的斗争を、派手に、それこそ、腹が痛くなる位やらなきゃならないと思うんですね。特に、我々のようにゲバルト一本やりという人間にいたっては――。

スケジュール斗争をやるだけが斗争じゃないんだ。毎日の一秒一秒を、どのように、いかに、肉体的にかつ精神的に、かかわるかが問題だと思う。

この意味において、我々が「反博」に参加したことは大変に、意味があったと思うし、産大斗争の出発点を、反博内部の斗争から見い出すことが出来たのは、特に評価すべきだと思うんです。何もパチンコが、産大斗争の出発点と、言ってるんじゃないんですよ。

我々、一人一人の内に設けられた「内在的べ平連」は、甘っちょろい連帯をはねのけるだろうし、「転向」と言う言葉は、我々にとって不要なものとなるのである。そして、産大においても、街頭においても、幅の広い、質のある斗争を敵＝权力者に、いどむであろうと思う（思いたい）。

我々はよくデモにおいて、「官憲をはねのけ、勝利したし」なんて、カッコイイ言葉を使いたがるんだが、このような外的斗争の勝利の前に、内的（肉体的・精神的）斗争の勝利を、つかみたいものだと考えるんだ。本当にここで言いたかったことは、革命ゴッコにはかり気をとられ、気ばっかりアセっちゃって、本当の意味での、もっと大きく幅広い、「革命」を忘れてしまってはいけないということなんだ。

自主製作上映映画「仮題不在証明」総括

製作上映実行委員会

我々はこれから自主製作映画「仮題不在証明」についての若干の報告を行なうわけだが、最初にことわっておきたいのは、我々の映画は既に完成したのではなく、（我々にとっての映画へこのことについては後で述べるが）は、依然製作続行しているものととらえたいと思う。これは、ただ単に上映回数が少ないという意味ではなく、又映画としての完成度が低いという意味でもなく、我々の映画「仮題不在証明」が我々自身の存在の不在でしかありえない現状況との関連においてしかとらえ得ないものであるからである。

まず我々は、何故映画を作るかという事にふれなければならないだろう。いやこの問題は、何故このようなものを作るのかという問いかけになるだろう。今我々はその問いに答える事はできない。〃何故？〃――

大学当局の検閲・監視の中において、萎縮してしまっている諸サークルの限界を指弾しつつ、真の創造目指して〃自主映画・製作上映運動が69年夏～秋に展開された。

この問に答えられる者が果しているだろうか。今自分自身の行動の中にある、いや果して今の我々にとって真に自立した行動がどれほどあるだろうか。何故か生まれてしまい、何故か生きてしまった20余年の中で我々はいかに答えるべきであろうか。

ただ我々は映画創作も我々の行動であるとしか言えない。つまり我々の行動の延長上にあるものをフィルムによって定着した以外のなにものでもないだけであるとしか言えない。我々は製作に際して「我々は。映画の変革効果等という甘い言葉に幻想など持っていないし、まして『映画は武器である』式の目的的芸術論からもはるかに遠い位置にいる。あくまでも映画は映画情況の中でしか語り得ないし、素材としての対象。創作主体。観客相互間のコミュニケーションさえも疑わしいのがその本質なのだ」（PROSPECUT創刊号、製作に寄せて）と不遜にも言い放ちさえしたのである。そんでも我々は映画製作に突進した。ただ我々の「自立した映像の創作を通じて主体としての自己内部を凝視することが可能となり、鋭く問題点を定着出来ると確信しているからであり、その映像を媒介にして異なる所に位置する観客に対して思考営為の資料として提出することができると確信している為である」（PROSPECUT創刊号、製作に寄せて）ということによってのみ。我々創造を目指す者にとって創造＝行動の論理が映画へと狩り立てるのである。従って我々のあらゆる行動が全て我々の映像であり、その定着化されたものでしか創造として成立し得ないのである。我々にとっては映画「仮題不在証明」は我々の行動の定着化の作業でしかなく、またこの映画が真に「創造されたもの」である為にはこの作品が（つまり定着されたものが）一瞬にして我々の「生」の領域に感覚を通じて飛びこんで来ない限り真に創造されたものとは言えないであろう。

以上我々の映画観のようなものを述べたわけだが、映画「仮題不在証明」について言えば「不在証明」とは何かと言う疑問につき当るだろう。何の何に対する不在証明であるのかと。簡単に言えば我々の状況に対する不在の証明であり、京都産業大学という犯罪的な大学の学生であるという事に対する不在の証明である。このことは単に京都産業大学に居るとか居ないとかの問題ではなく、このような犯罪的なものを認めるか否かという意味での不在であり、我々の不在証明である。従って我々は「京産大に居たくない者は大学を去れ」などと言うような論理の短絡を拒否し、またそのような者に対し断固として我々の意志をこのように宣言するであろう。つまり「我々の現在の存在は不条理なものである。だがこの不条理な存在は我々が真に我々の意志によって決定したものではない。しかし我々は真に自由で平等な存在を獲得するまでは不条理な存在でしかあり得ない。従って我々はこの不条理な存在の中で我々が実存在できる方向での存在の様式によってしか生存できない。従って我々は生存の為に我々自身が決めた様式で不条理な生を生活していくのだ」と。従って我々の不在証明は我々自身の生存の様式の確立であり、同時に我々の実存在できる状況そのものへの展望であり、またこれは同時に実存在できる状況の確立でもあると言えよう。つまり我々の映画「仮題不在証明」は現状への拒否でありまた反逆の証しである。

従って我々の映画は我々にとって闘いとなるべきものであった。まさしく我々にとっての闘い＝映画となるべきであったのだが我々は苦しみと、悲しみと、自己の絶望とを背負い込んで否定的な言葉を用いなければならない。我々は作品化の最中に自らの中にある非創造性と自己の主体性の弱さを暴露せずにはいられない。我々創造主体にとって創造する行為には常に定着した物が存在する以上、その作品が自らを暴露する残虐さに打ちのめされることは必然であるにしても、我々は自主製作映画に対して自己嫌悪を持たざるを得ない。

だが我々はなまごとを並べることはよそう。我々の作品である限り作品については我々で引受けるしかないのだ。だが我々には作品の質の外に公開等の克服できない技術的問題がある。我々は昨年11月22日に先進的学友の手によって行なわれた「反神山祭」において公開したわけだが、我々はもっと多くの学友に見てもらいたいしまたそれを追求する必要がある。しかし学内における公開も一切の文化的施設を持たず、また一切の弾圧体制下にあっては我々の力では困難がつきまとうことも事実である。だが我々はゲリラ的手段を用いても我々はこの自主映画「仮題不在証明」を映写し続けるであろう。そしてまた我々はなおも新しく創造へと出発するであろう。

この報告は闘いの為の自主出版「闘いの譜」に掲載されるわけだが、我々創造する者にとって闘いとはそもそも何であろうか。つまり創造を、我々の生存において創造した物が直接的に我々の生の領域に飛び込んで来るものであると規定する限り、我々の生そのものを発見し得ずして創造は語り得ない。従って闘い＝創造

とおく我々にとって問いとは我々の生存そのものへの志向ではないだろうか。つまり我々の生存の様式の確立である。つまり我々が生に向ってのあらゆる行動が全て創造行為なのではないだろうか。その中で我々の意志によって定着しようとするものが創造されたものである。創造とは我々の生そのものであり、我々の行動そのものである。従って我々にとって問いとは我々の生の発見であり、生の確立であり、生の遂行であろう。

我々はたとえ中間報告にしても、我々自主映画製作上映実行委員としての総括である以上我々の自主製作映画について語らねばならないであろう。だが我々は語る前に絶望してしまう。何よりも問いである前に果して我々の作品が創造であったのかという深い絶望に陥いる。「若者よもっと深く絶望せよ」と言ったのはたしか吉本隆明であったか。

絶望は我々に沈黙を強いる。だが70年という情況は果して沈黙を許すであろうか。我々が絶望の中で黙とうしている事は我々の生の発見を、そして確立をさまたげるであろう。

この映画製作によって証明されたのは我々自身の不在もしくは不存在そのものでしかなかった。しかし我我は我々の存在そのものを〝行為〟する事でしか確認できない以上新たなる出発を目指さねばならないだろう。それはまさしく我々の問いへの出発＝我々自身への問いを始めるであろう。

さあ共に出発しよう。我々の生の為に

我々の生の為に

（O.H）

大学当局と密着した形において、自治会の暴力的破壊と乗っ取りを果した右翼集団が提起する神山祭を拒否し、自らの主体性を確立するためにこそ学園祭はなければならないという意図で69年11月22日「反神山祭」開催され五十数名が結集した。

反神山祭総括

反神山祭実行委員会

産大斗争の全ての萌芽や原型が、一・二七＝ン子斗争件を基点としているように、「反神山祭」の発想もまさに右翼の策動によってなしくずし的に成立した六者仮執行部と、それに続く馬場執行部の運営線上にある右翼、秩序派の一大総括としての「神山祭」に反対＝粉砕の具体的意志表示をしようとすることから始まる。

当然のことながら、一・二七を象徴とするレッドパージは、学生間だけで起きた現象ではないのであって、産協路線を無内実的に建学理念に据え、政府自民党の大学構想を先取りして一切の批判的精神を育てる土壌を抹殺し、我々に中級労働力＝商品として

の完成を強要している産大右翼反動体制の生みだしたものに他ならないのである。これは、今まで行なわれてきた学内における「文化活動」又は「真理の探求」と名のつくものは、弾圧学則と右翼反動教育体制に包含され、全く御用化された存在にすぎなく、我々独自の自主的活動は、これらの中では全く不可能であったことでも示される。

かかる観点に立つならば、一・二七事件とこれ以後の右翼、秩序派の独壇場は決して偶然にもたらされたものではなく産大体制の必然であって、これに立ち向い止揚するには産協路線とそれに規定される産大体制の根本的解明へと向い方向づけを行なわねばならなか

ったのである。そうした認識のもとに、我々の追求する「真理の探求」「学問の自由」は、単に現体制内における改良的行動で実現するものではなく、我々個々が大学に対する〈反大学〉の積極的行動をとることから、その理念を獲得できるのだ、と前提し、産大の諸矛盾がまさに産大個々の問題ではなく、現体制が造り出し推持しようとするものに他ならない事、即ち小情況から大情況を把える認識作業の必要が生じたのであった。

「反神山祭」とは、まさしく産学、軍学協同によって帝国主義的野望をとげようとする現体制が、一、二七に象徴される学内の矛盾を必然としたものであることを確認し、我々個々の方向性を追求しようとするものである。

だからと言って、我々は観念的に論理をふり回すものではなく、「反神山祭」はそれに参加した時点から産大に対する何らかの各自の行動が始まらなければ無意味なのである。

我々の認識の深化と現実に生きている生活基盤との関係を明確にし、それを思想性にまで高める第一歩のためにのみ意味をもつものであったのである。

×××××

そうした目標のために十月中旬に反神山祭実行委員会を結成するとともに、十・二一反戦デーにおいて他の部分と連帯した全学ストの設望をもちつつ学内における具体的行動をもって、全学的昂揚を構築し、反神山祭へのワンステップとするべく第一号パンフ「十・二一全学ストに結集せよ」を発行した。

しかし、十・二一斗争の主催団体である十・二一統一行動委員会と話し合う中で、反神山祭を産大斗争の一環として、十・二一においての具体的行動をその過程への手段として位置づけていた我々と、カンパニア斗争として位置づけていた統一行動委員会との質的相違が明確となり、又我々が十・二一斗争＝個別産大斗争と大状況とは無関係に結びつけていたことによる行動的必然性があいまいになり、共斗を断念したのである。ここにおいて、他の部分との共斗を簡単にえられると思っていた我々の甘さが自覚化され、当然の事ながらまず我々自身が独自で反神山祭への展望を切り拓かない限り、その貫徹は困難であることを暗示させられたのである。

その後、十・二一斗争での全学ストの破産を自己批判しつつ、数度同志社大学で行なわれた総括集会に参加し、他の部分の結集を要望したのであるが、それも積極的参加を得られず（後に映像研と反帝反修学生戦線が参加）、反神山祭実行委員会が単独でもって全て

の準備作業を貫徹しなければならなかった。小人数による力量不足の結果はまぬがれえず、大々的に反神山祭を開催することは不可能となり、何度か空白の時間を我々の間でも持たなければならなかったこともあった。

そうした情況の中で、まず我々がぶつかった問題は十一月一日から始まる神山祭までの時間的切迫と資金面での欠乏であり、その問題の解決はほとんど絶望的で準備作業を進展していくうちにおいて会場の時期的都合もかみ合って、神山祭期間中開催の有効性を断念、京都市内で唯一の全学封鎖を貫徹していた同志社大学において十一月二十二日に開催することを決定したのである。

この頃から我々の活動も軌道にのりはじめたが、次に我々を悩ませたのは、企画と講演者の問題であった。企画は早急に現実化しなければならないところから、パネルディスカッション一本にしぼり、反帝反修学生戦線、映像研の映画および訪中報告会が加えられ、落着した。

講演者は、我々が何らかの資金的裏付けを、コネクションをもっていなかったため、暗中模索の状態であったが、産協批判を講演の骨子としてそれに則した講演者を選別し、当ってくだけろ式で、羽仁五郎氏、井上清氏と接渉したが、スケジュール的都合でつぶれ、最後に京都大学山田稔助教授の賛同を得、友人の京都女子大大槻欽男氏と共に講演者を決定したのである。

このように準備作業を進展していくと共に我々は、学友の広範な結集をはかるために学内においての非合法的情宣活動を積極的に展開していったのである。この危険を伴なう活動に関しては、ビラ配布と口こみ以外手段化できなかったが、反神山祭までに我々がまいたビラ、ステッカーは五、六千枚以上にのぼった。

ここで総括的に述べてみることにする。

我々の発想は即ちこの場を主催者という固定物に支配されてしまうことなく、各自の参加によって維持し発展させるのと同時に引いてはそれが我々自身を産大に対する対立行動へと深化させる為の一ステップにしなければならないというものであった。

しかしながら我々は「反神山祭」が成功か否かという結果論的問いに対しては甚だ弱い立場にあると言わねばならない。それは人的に三十数名の学友の参加しか得られなかった事等である。その原因としては、確かに学外、同志社で行なわれた状況や天候が悪かった事等も指適されようが、それと共に我々計画者自身の姿勢も批判されなければならないだろう。それは学内における情宣活動がビラのみという消極的な態度であ

る、つまり我々の掲げた直接行動への一ステップとは裏腹に、行動に誘う体勢が非常に弱く「参加」のみの姿勢に終りがちな要素を多分に持っていたことである。即ち学内における内的矛盾といわれる諸矛盾、（検閲、処分問題、その他非人道的学則等）を何らかの手段で一部でも表面的に露程できなかったことである。反神山祭が我々の日常化した反動体制への告発として隆起してきたとするならば、当然それらの対立関係を大衆的に明らかにすべきものだからである。又に我々がもっと大きく問題視したかった「産協路線の犯罪性」の中に於てまだ出し尽くせなかったけれども、人権無視の高度の産業社会化現象とそれに密接な関連を持つ大学の（近代化路線）の相互の関係は、我々の斗争の中で明確に位置づけられてはいるが、産大の状況を考える時、まだまだその斗争の主体的役割にはなっていないのではないだろうか。それは、我々が行動の中で打ち出すことはあっても、民青の所謂「学園民主化」の政策と明確な対立を学園内においてやれないということで明らかなことである。つまり今の状況の基で「検閲、処分……」等の一般的問題提起をも我々は推行しなければならないという弱点を持っているからである。例えば初歩的には「政治活動の自由」云々を見ても政治活動の自由を文章的に得るのは全く無意味なことは明らか　なことであるが、それでは、その目的を現産大の状況の基でなし崩しに獲得することが出き得るかというと、已然として不明確である。それは「出来ない」ということでなく「やっていない」のであるが……。そこでは、それなら反神山祭を我々としてどう位置づけていくかという問題になるが、展望が開けるか否かの問題で、やはり何かをやったから展望が開かれるのではなく、展望が開ける様にやるからこそそこで展望が生まれるのである。個々の意識の違いにもより詳細な分析は不可能だが、三十数名とにかく集まり討議を行なったことつまりは行動の意志する者が集まったことは何らかの自己意識あるいは、行動への一ステップを得られたものと思わざるを得ない。

最後に、我々の作成したパネルディスカッションの資料等も枚数の上での制限もあって何か出しきれぬ物が残る。そこでこれから先、機会あるごとに続けて産協路線について認識を深め、それなりの行動はやるつもりである。

産大に於いて不当退学させられた

森君からの連帯のアピール

一昨年十一月、佐藤訪米阻止斗争を前に控えて、森君（属するセクト赤軍派）は大阪戦争、東京戦争の前段階武装蜂起をもって十一月に拠もうとし、大学産において権力により不当逮捕されました。そしてそれ以降、すなわち十一月十日より今日まで不当拘置されており、今なお獄中において階級斗争を戦闘的に闘っています。又彼自身は産大の学校当局の手によって、なんら本人に事前予告もないまま学校当局の独断で不当退学を余儀なくされたのです。

今度、獄中で闘っている彼からの手紙が届き、産大で闘っている我々に対する強それ自体が一つの刑罰となっている、不当な長期拘留を闘い抜いている森君のアッピール文が、産大救対より配布されたのでここに再録する。なお森君のより緻密な総括の展開が『産大斗争』として救対より発行されているのでぜ読を請う。

なお森君への連絡は

東京都豊島区東池袋3の一の一

東京拘置所内　森　輝雄

固な連帯のアピールがよせられましたのでここに記載しました。

京都産業大学救援連絡会議

なお右への連絡は京都救援連絡会議を通じて行なって下さい。TEL（三六一）八六一六

前略

先日のビラ、新聞及び現金等の差し入れ非常に感謝しております。

すぐに返事を出すつもりだったのですが、東京での公判や、大阪への移監（19日）などですっかり遅くなってしまった事をおわびします。大阪には公判（30日1時）のために来たのですが、7月7日に東京で公判があるためここでも腰を落ちつけることは出来ません。

さて、お送り下さった新聞、ビラですが、京都の状況を知る上で少なからず参考になりました。特に産大関係のは産大の状況が気になっていたこともあり、非常にうれしく読ませていただきました。そして産大の学友諸君の不屈の闘志を見る様で心強さを感じました。思えば昨年春↓夏に、微弱ながら一定の高揚を見ながらも爆発へと牽引しきれず心残りを感じつつも、昨年闘争に重大な意味を見て決起し、目的を達せず逮捕されてしまったのです。その後ずっと勾禁されているのですが、時おり外で戦列に加わりたいとの思いがムラムラとわき起ってきます。そんな時きまって〝産大の諸君どうしているのかなあ〟と思っていますが〝我々（RA派＝赤軍派）と権力〟〝学反諸君と産大当局＝右翼〟の関係から連絡すら出来ず、苛々していたものです。産大の諸君らのビラ等を読んでうれしさのあまり、あなた方から我が学反諸君に連絡が可能かどうかも知らず、自らの昨年春↓夏の自己批判的総括を加えて、アピール(?)を書くことに決めました。ご迷惑とは思いますが、その文章を産大の学反諸君に渡していただきたいと思っております。紙数制限の為、分割してお送りしますのでご諒承下さい。勝手な事ばかり書いて全く申し訳ありませんが、何とぞ宜しくお願い致します。

1970年6月25日

京都救援連絡会議様

森　輝雄

産大の全ての活動家諸君・学友諸君。同志諸君！

一昨年の日大・東大闘争を起点とし、とりわけ昨年1月18日、19日の安田攻防戦を媒介として全国に広がった学園闘争＝全共闘M（運動）は、学園斗争が個別学園斗争として完結し得ず、又、国家権力を突破する事なしに勝利出来ないことを他ならぬ学園斗争を徹底して闘う中で明白にしてきた。そして全共Mがその中で明らかにしたもう一つの点は、眼前に〝壁〟として立ちはだかった権力そのものが、着々と〝来たるべき時代〟に向けて再編される姿であった。日米安保条約の拡大、沖縄の72年〝返還〟と再編、自衛隊の強化（軍隊への道）、国内抑圧体制の強化（＝公安の秘密警察化、特高化）等々、このような再編は、現実に安保の地域拡大（韓国・台湾・マラッカ海峡の安全宣言）、沖縄の日米共同基地化（以上、昨秋共同声明etc.）中曽根元帥の〝原潜〟発言（4/14国会）、先日の全国公安警備課長会議としてあらわれ、これら総体の示すところは、明らかに日帝の海外侵略＝反R（共産主義）戦争への布石であり、日帝がアジアの盟主たるべく、対中戦争をも決意してゆくものとしてあるだろう。

佐藤安保決戦は、これらが具体的には、佐藤の訪米により決定するのを粉砕する闘いとしてあったし、それゆえに訪米阻止を、ただ単に意志表示するだけでなく真剣に〝佐藤が訪米できない情況を作る〟とか〝沖縄問題にかかわっておれない情況を作る〟とかが語られ、それ自体、自然発生性ではあれ〝政治危機〟をも望むものとしてあったし、現実の闘いの中で、安保のみならず、体制をもくつがえそうといった大胆な志向があった。昨秋斗争にはこのような重大な意味（＝願望）があったのだし、それゆえにこそ数多くの人民が決起したのである。しかしながら昨秋斗争は、勝利し得ない闘いであったし、その原因は、技術的要因もさることながら、政治危機を創出し、権力斗争を牽引するだけの軍事を組織し得る党の不在と、権力斗争の永続化を保証するものがなかったことに主要に求められねばならないし、現在もまだ克服されていない。我々はこれの克服を外の諸君に要請しよう。（昨秋斗争を勝利とする向きもあるが、仮に百歩ゆずってそのセクトの勝利を認めても〝人民〟は明らかに敗北したのだ）日帝の全市民社会末端までの帝国主義的再編の中で、もう一つ絶対に欠落させてはならない重大なものがある。いうまでもなく、イデオロギー統一である。

昨秋の自警団の出現で大衆操作にある程度自信を深

めた。日帝ブルジョワジーは〝法の名のもとに暴力をふるう〟を一層拡大するための布石として折から起ったシージャック事件をその舞台として設定した。犯人＝川藤を射殺したのは、明らかに階級敵、ことに新左翼に対する恫喝であったと同時に〝暴徒射殺〟に対する人民の反応の調査が追求されていたことを忘れてはならない。（警察の発表を総合すれば明白になるでしょう）この事件はブルジョワジーの意図を象徴的に暗示しているが、しかしここでの主題は、昨夏の大学立法をテコとして全教育体制をブルジョワイデオロギーの教宣場と化そうとしていることである。初等・中等教育をほぼ手中におさめた文部省は、更に大学をも手中にすべく、種々な攻撃を戦斗的な学友に対し加えている。我々及び我が産大においてもこれらから例外であることは出来ず、逆にすでに産大こそ全国の大学再編のモデルとなっている。我々学生の一切の権利が剝奪され、学内には公然と反人民＝反R的な教宣（講義）が横行し、自由や権利を要求する学友に対し有無を言わせず暴力的に排除するといったことが、前述のモデル的地位により大学当局が得る利益を守るためであり それがブルジョワジー総体の利益に合致していることも我々は知っている。（続きは追ってすぐ別便でお送りします）更に我が大学の石翼私兵どもが昨年来、京都及び関西の各大学の斗争破壊に狂奔し、大学私兵たるにとどまらず、反人民＝反Rの突撃隊として機能していることも知っているし、これらから京都産業大学が反Rの砦、ファシズムの温床としてあるのを認めないわけにはゆかないであろう。産大当局と右翼は権力と一体となって、自らとブルジョワジーの利益のために学生を収奪、迫害し、労働力商品として更なる収奪の機構の中へ売りとばそうとしているのだ。労働者はすでに以前からブルジョワに搾取され、労働官僚に裏切られ、帝国主義の再編の中で反Rへと組み込まれることを余儀なくされている。

学友諸君！活動家・同志諸君！

このような困難な状況の中で、産大斗争を真に爆発させ得るか否か、領導し得るか否かは全て諸君の手にかかっている。そして諸君自らが、昨年春↓夏への自然発生性を脱し、目的意識性を獲得しているか否かにもかかわっている。昨年春↓夏に一定の高揚が、全共闘Mと東大斗争参加者への政治的処分により生まれつつも大爆発へと牽引し切れなかったのは、未経験から来る自然発生性への依拠と、右翼との対立から普段に生じていた左右の日和見主義、又セクト主義等々が全共闘内部に充満していたためであった。反暴力キャンペーン、自治会及び合法斗争、おどおどした非合法活動は自然発生的活動の典型であるし、この中からは右翼日和見主義が生れる。左翼日和見主義者は、大衆への働きかけをせず、無媒介的に、封鎖を志向しようとする。又、逆の端である大衆運動主義者は、大衆の先頭で彼等を引き上げ昂めようとせず、大衆の自然発生的な怒りに期待しようとする。そして最もやっかいなのは、セクト主義者であり、彼等はセクトの利害を大衆に押しつけ、又、囲い込み、街頭へと引き廻そうとする潮流である。勿論政治闘争は、誰だって否定しないし、産大闘争そのものが当初から政治性を持つものであり、産大闘争を追求する中から街頭政治闘争が重大な意味を持っているのは厳然たる事実である。しかしセクト主義者は、セクトの利益（私益）を優先させ結果的に闘争を放棄し、闘争を破壊することになるのである。（セクト員やシンパ層のセクト活動に文句をつけるのではなく、大衆諸君を引き廻そうとすることが許せないのである）諸君が闘争を領導する所に〝産大闘争そのもの〟を街頭に引き出してはならない。原点を産大に定め、産大を獲得すると言った目標を確固たるものとしてでなくては街頭へ出られないし、大衆に意義などを宣伝し納得ずくでなければ街頭へ引き出してはならない。（現在京都において、産大の学友諸君があらゆるデモの先頭に立っているのを聞いて頼もしく思っているし、セクト主義が発生していないのをうれしく思っている）そしてその原点＝学内への取り組みについては、公然たる非合法闘争を基調にして、大衆実力闘争をもってしなければならない。すでに明らかな様に、闘争の持続と勝利に大衆の〝決起〟が不可決であり、一方で大衆の決起を導くためには我々の側が〝力〟を持たねばならず、一種のジレンマが普段に生じるが、このジレンマは産大内部の主要な敵を攻撃することにより解消するだろうし、その敵はゲバルトに耐え得る〝少数〟の右翼反R突撃隊であると指摘できるだろう。我々はこれらを粉砕できるであろうしその力をすでに確実に持っているのだ。しかしながら残念なことに、右翼との対峙に至る段階で、処分の恫喝や白色テロを恐れ、右翼的な日和見主義に陥る諸君が、活動家の中にさえ存在する。この傾向を断固として克服する必要がある。我々は処分を恐れてはならないし、逆に処分を引き出し、自らを永遠の産大生と位置づけると同時に、その処分をノキネにしようとする意識性が要求されるし、産大闘争の勝利まで産大生であろうとするのは日和見主義である。我々が処分の撤回を要求するのは、それが活動と密着しているからであり、処分撤回により処分の理由となっていた活動の

自由が勝ち取られることになるからである。これは目的意識性である。処分の撤回そのものを自己目的化してはならないし、そのような闘争への姿勢からは絶対に勝利が生まれないどころか、処分の恫喝に怯する活動家諸君が出てくるのも当然である。私は、活動家、同志諸君に、大家の名において革命的英雄性、自己犠牲性、献身性を要求する。

更に我々は全共闘Mが示したところの教訓を血肉化させる必要があるし、先ず敵対せざるものとは手を組む必要があることと、第二に地域性を持つことである。現在文連を中心に、若干の変化があるようだが、これらに対し、我々は独自な立場、活動を保持し、彼等を批判すると同時に協調しなければならない。具体的には、彼等の当局に対する要求を、我々自らの立場から支持し、同時に彼等の姿勢に対する批判と我々の方針を大衆的に宣伝してゆく等のことである。さて次に我々の重大な任務は、全共闘Mの最大の弱点であった地域性のなさを克服止揚することである。先に産大闘争が右翼・反Rの砦、ファシズムの温床であることを指摘したが、そうであるがゆえに、なおさら我々は産大闘争の地域への波及を、地域共闘として組織する方向性を持ち、我が右翼どもを、産大のみならず地域からもたたき出し、乃至はセンメツしなければならない。

産大を真に解放するにはリなくとも、上賀茂及び活北地区の解放と一体であることを明記しておく必要があるだろう。〝砦〟だけでは勝利出来ないし、我々の闘いが、国家権力との対決を不可欠とするものとしてあるが故に、我々は闘争を地域闘争から全国の統一戦線へと組織するダイナミックな意識性を獲得する必要があるのだ。学反諸君！ 活動家同志諸君!! 闘おうではないか！ 私自らも、例え何年拘禁されようと必ずや産大に帰り、諸君の先頭に立って闘うことを約束しよう。

石翼＝反革命の砦・ファシズムの温床を解体せよ！
荒木＝小野体制打倒・産大闘争勝利！

7・21獄中より森君の手紙が届きました

産大学反諸君へ！

手紙、新聞・ビラetc受け取りました。読んでいるとじっとしておられない様な気持にさせられます。（でもこればかりはネ。三畳の房内で動いても意味ないことです。）さて京都は相別暑いことでしょうが、それ以上に戦う学反諸君にとっては、昨年以上に〝長く暑い夏〟になると言えるでしょう。だが忘れてはいけない。闘いは、まだ始まったばかりなのだ。現在の停滞は、

次の飛躍への前兆であり、敵が肥大するのは我々の闘争の成果なのだ。処分の頻発、右翼の組織化もそうである。我々が闘えば闘うほどそれだけ敵は強大になるが、それは敵の強さではなく、他ならぬ弱さの表現であり、強権的でなければ秩序を維持できない所まで彼らが追い込まれている証左なのだ。君の手紙を読んでいると悲観的な面が強く感じられるが、総括法に若干問題があると思う。もちろん、対权力、対当局関係を考慮に入れてもである。日大の秋田明大君が何かの時に〝弾圧が激しければ、それだけ闘争は起り得る〟と言っていた事があるが僕も基本的に同感だ。我々が〝民主化〟と言う時、何を規準にするだろうか？我々はその言葉の中に即時的には、人権宣言や憲法に明文化された基本的人権の保証、すなわち〝他の場所で既に与えられている自由〟を要求すると言った内容を含ませていることだろう。勝ち取られた自由は勿論、与えられた自由であってもそれを剥奪しようとすれば、抵抗の生じるのは自明の理であり、一般的に〝自由は後退し得ない〟と言われる所以である。同様に一定程度の自由に浴してきた学反諸君が、産大という砦に一歩足を踏み入れた途端に、一切の既得の自由が剥奪されるのに何の抵抗も感じない事があり得ず、それ故爆発の条件が潜在しているのは厳然たる事実なのである。

（実際はもう少し複雑な理由が介在するのだが、とまれ秋田君の論理は成立するのだ）しかし、それは学反諸君がこの闘幾度となく実践的に確認してきた様に、あくまでも〝潜在〟にすぎないのだ。我々の闘争は言わばこの潜在するエネルギーを発掘することが絶対的に第一段階なのだ。――悲観することはない。簡単に成功するわけはないのだ――更に産大において闘争の客体条件は日大よりも大なるものがある。八日大の三十億の問題は、闘争の契機を全学的な普遍性を持って提起した点で重要なのであって、一部諸君の言うように〝この件がなければ、日大闘争は起り得なかった〟とするのは決定的に誤りであり、この様な総括は待期主義を招く〉以上大きく言って二つの点で、産大において闘争のおこる客体条件は成熟し潜在している。それゆえ我々の課題は、主体の側の総括をより緻密にやりなおす事でなければならない。それは昨年1/27・28のいわゆる〝志学会事件〟や、K、M両君の〝東大処分〟といった客体条件の煮つまりによる闘争の飛躍発展の契機を流産させた我々主体の弱さの総括であり、その克服を追及することなのだ。それではこの潜在性を爆発へと導く主体における条件とは何であるのか？この問に昨春闘争etcを総括することで答えて見ようと思う。君の手紙に見られる様に、学反諸君の戦闘性、献

身性は明白であり、威嚇するばかりである。又、創造性においても、活北大学共闘会議目を見張るものがある。だが残念なことに、それらを本当に領導する主体が欠徐している。虚心せずに言わせてもらうならば、旧産大BUND（以下Bと略記）が昨年五～六月段階においても志向した地平を突破し得ていないばかりか、その地平にすら到達していない。結果的に全闘委の闘争となった、Bの昨年五月十五日の学内への突入を自然発生的ではあるが、三百～四百の大衆を結集し得た事で我々は勝利と見なし、更なる前進のために〝連続的、恒常的学内集会〟を提起した。連続的、恒常的な（集会を含む）闘争だけが、新たなる地平を切り開くことを、我々Bはすでに確認していたからである。しかし不幸なことに、我々の提案は5・15集会を敗北とする諸君が多数を占めたことにより、全闘委全体集会で否決されてしまった。敗北とした根拠がはっきりとしないが、言うまでもなくこれは日和見主義なのである。それでも我々B内部にはこの重大な戦術を、B単独でも貫徹しようとする意見が大勢を占めていた。今から考えても、当然、再突入すべきであったと思うが如何せん、B単独では絶対的力量が不足していたのである。5・15においても我々が全闘委内部の反対者を押し切ってやったことであるし、これ以上独走した場合、全闘委の援助が考えられず、せめて35～40と思った数に満たないため我々の方針を全面的に転換した。これはその後の闘争に、非常に重大な意味を持っていたと思う。とまれ闘争は、ダイナミックに展開すべきであり、戦闘的な集会であっても、それが単発的に終ってしまう限り勝利し得ないものなのである。と同時に連続的集会を組み得ないものが、主要に活動家諸君の尻ごみ（＝日和見）に起因しているのをも指摘しておく必要がある。まさしく我々が昨年5月に提起した方針とは、そのような困難ではあるが、確実に勝利、否、勝利への第一歩を展望することのできる戦術だったのである。この地平を乗り越えなければ、勝利どころか〝大衆の信頼〟すら勝ち取れないであろう。言いづらいことであるが、産大闘争における主体はまだ形成されておらず、闘いを担っているセクト、ノンセクトを問わず、少数の学友諸君自らが全共闘M、安保の高揚と言った外在的条件に振り回されており、にもかかわらず闘争の後退を産大における客体条件の未成熟に転化することにより、責任逃れをしているのだ。そうではないのだ。我々は未だ産大内部において連続的な集会すら闘い取っていないのだ！大衆が信頼を寄せるだけの主体（＝主体的力量）を持っていないのだ。問題は力＝ゲバルトなのだ。大衆を決起させ得るのは

唯一、石翼をはねのける暴力的力量であり、処分に抵抗し得るだけの主体の側の力量なのだ。ここにジレンマの生じることは既に書いた。しかし我々が40名～50名の密集した部隊を結集するのはそれ程困難なことだとは思わないのだ。それから我々が闘ったら何らかの形で、一般学生の援助があるといった考えは破産した。とあるが、そんな考えは始めから破産する運命にあるのだ。それ程安易なものであるなら、前述のジレンマは現象する余地がないのである。大衆の援助は我々独自の強固な部隊で石翼をはねのけて始めて期待できるのであり、当初から大衆をあてにするのはそもそもの戦術の誤りなのである。革マルの諸君にしてもそうだ。昨年5・15集会を敗北としながらも、何ら戦術的飛躍がないばかりか、代りの戦術（方針も提起出来ず、我々が一年前に提起した戦術を、より後退した地点で、より矮小な形で、追随しているにすぎないのだ。それともあれは、Bが提起したので、ヘゲモニー上の都合で敗北と決めつけたのだろうか？昨年のあの時期なら40～50名の意志強固な人間は常時いた様に思う。古い事のむし返しは意味がないので止めるが、主体の側が昨年よりもはるかに後退していることを指摘しておきたい。そして逆に石翼は組織され、強大化されているとの事だが、我々は十分勝つ事が出来る。ただ小手先だけの闘争では勝利し得ない。大胆さだけが勝利を確保し得るだけの主体の側の力量なのだ。ここにジレンマの生じることは既に書いた。しかし我々が40名～50名の密集した部隊を結集するのはそれ程困難なことだとは思わないのだ。それから我々が闘ったら何らかの形で、一般学生の援助があるといった考えは破産した。とあるが、そんな考えは始めから破産する運命にあるのだ。それ程安易なものであるなら、前述のジレンマは現象する余地がないのである。大衆の援助は我々独自の強固な部隊で石翼をはねのけて始めて期待できるのであり、当初から大衆をあてにするのはそもそもの戦術の誤りなのである。革マルの諸君にしてもそうだ。昨年5・15集会を敗北としながらも、何ら戦術的飛躍がないばかりか、代りの戦術（方針も提起出来ず、我々が一年前に提起した戦術を、より後退した地点で、より矮小な形で、追随しているにすぎないのだ。それともあれは、Bが提起したので、ヘゲモニー上の都合で敗北と決めつけたのだろうか？昨年のあの時期なら40～50名の意志強固な人間は常時いた様に思う。古い事のむし返しは意味がないので止めるが、主体の側が昨年よりもはるかに後退していることを指摘しておきたい。そして逆に石翼は組織され、強大化されているとの事だが、我々は十分勝つ事が出来る。ただ小手先だけの闘争では勝利し得ない。大胆さだけが勝利を確保し得るだけの主体の側の力量なのだ。以上、総括的に述べた事で、少なからず理解してもらえたと思うが、昨秋、今春のいずれもきわめて自然生長的であり、昨春我々が志向した地平よりもむしろ後退している。それから、ちょっと横道にそれるが我々が〝大衆的実力闘争〟と言う時、主体的観点からは常に活動家諸君がその先頭にいる事を忘れてはいけない。確かに闘争は、大衆の自由で創造的な活動ではあるが、それを指導するのは、大衆的爆発を目的意識的に追求している諸君なのである。それに大衆が、真に創造性を発揮するのは、何よりも彼等が当局（権力）から自由になった時であり、その状態を創造するのが先進的活動家諸君の任務なのだ。（何度これだって大衆と結合しての芸術である）それから最後にもう一点〝産大闘争とは何なのかを捉え返す必要がある〟との由、当然ではあるが、主体性を欠落させた総括からでは結論であるならば絶対に反対である。又、これまでの闘争視点を離れ、全く別の観点から再出発しようとするのも決定的に誤りである。我々に、何よりも欠けているのは、何度も言うが、「徹頭徹尾、大衆を指導できる主体」と、「何が何でも大衆を決起させるのだ」といった意識性」なのだ。

それでは産大闘争の捉え直しは如何なるものである

のか？それは一口で言えば「我々が闘争の中で、実践的に、あるいは理論的に学んできた教訓を総括し、血肉化することだ」と云うごく平凡なことに尽きるだろう。とりわけ斗争が個別産大闘争としては、明らかに限界を持っている故に、現代日本（↔世界）の中で、如何なる社会的普遍性を持ったものとして、闘争を位置づけるのかは、非常に重要な課題であるだろう。

これの適正なる措定が、社会との有機的関係を目に見えるもとなし、学反諸君に展望を与え、彼等の不決断を克服し、又、戦闘的諸君の不必要な消耗を阻止することにもつながるのである。詳細は次の機会に譲るが、換言すれば、産大闘争そのものと、学生大衆が生活することの出来る、又、永続的にも闘うことの出来る、そのような普遍性を付与することである。

とまれ、主体的総括の欠徐（乃至は不足、甘さ）はこれからも我々に戦性や敗北を強要し、決定的場面での後退を結果することになるので、再度、産大の全闘争を総括し直すことを諸君に要求する。（総括は何度でもやりすぎではない。）種々の制約のため、産大闘争の位置の措定、それとセクトアレルギー等、セクトとノンセクトの間の問題の性質とその処理などに言及するに至らなかったが、次の機会にでも出来るだけ述べてみたいと思っている。と言った所で、学反諸君の更なる活躍を期待しつつペンを置く。尚、批判の域を越えた表現などがあったとしたら許していただきたい。以上です。

連続的集会・恒常的対決を勝ち取れ！
石翼を粉砕し・処分撤回を勝ち取れ！
活北大学共闘を地域共闘へ！

あとがき

昨年十二月下旬に、アッピール「発刊に向って」を出して以来、当初の二月刊行を、四月、六月と次々に延期し、遂に丸一年も時間をかけてしまった。その間に、六月の長い闘いの時期を含んでいたとはいえ、そのことは怠惰の言訳にはならないし、時間をかけた分だけ内容が充実したとは言えないのが残念である。又、多数の諸君の参加を得て、本書を刊行するという〈行為〉そのものを、一つの〈場〉の確立にまで高めようという意図が達成出来ず、「用かれた営為」として貫徹出来なかったことも無念でならない。

本書が「産大闘争のために…」なるなどということは、明らかに幻想にしか過ぎないが、否定すべきものを否定する一つの〈契機〉として、私達は本書を送り出す。〈総括〉には、いかなる代理発言も必要とされないように、私達の〈経験〉を〝思い出〟に賤しめるあらゆる視座を葬り去らねばならない。本書の内容や編集傾向は勿論のこと、出版行為そのものに対する〈批判〉さえも私達の望むところである。願わくば本書を、〝昔話〟の本箱に仕舞い込まれることの無きよう――。

最後に、本書の準備段階から批判や支援を続けてくれた諸君、とりわけ編集、印刷・製本等に尽力してくれた諸君に深い謝意を捧げると共に、産大闘争を闘っている諸君を始め、各戦線・獄中で闘い抜いている諸君に連帯の挨拶を送る。現在的なあり様がどれ程隔たっていようと、孤絶した〈位相〉の中にこそ、〈連帯〉への萌芽があることを信じて――。

一九七〇年十一月

「闘いの譜」編集発行委員会

闘いの譜

産大闘争深化のために

発行日　一九七〇年十一月二十五日
編集発行　「闘いの譜」編集発行委員会
印　　刷　西峰印刷・グランド印刷ヨシオ
出版協力　さんりん社

戦旗社之印

300

闘いの譜

産大斗争深化のために